魔法少女リリカルなのは　微チートなんだ

黒いエナメル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　微チートなんだ

【Ｎコード】
Ｎ５７８７Ｎ

【作者名】
黒いエナメル

【あらすじ】
このお話は神が転生＋能力をしてくると言ったのだが、
なんとなくチートを遠慮して微妙にチートな能力をもらった男の子のお話。
転生先は「リリカルなのは」
そして転生してみると名前は「フェイト・アーウェルンクス」ってあの名前じゃん。
つーかここリリカルな世界じゃ、フェイトってややこしくなるし

とまあ別の作品も書いているので、投稿は亀になると思います。
駄文に高確率になると思います。
もしかしたら原作壊しちゃうかもしれません。
そんな駄作でもよろしいという方はどうぞ御覧ください。
皆さん楽しんでくれたら幸いです。

プロローグ　幼いころのとある一日（前書き）

すいません。
つい書いてしまいました。
楽しんでいってくれたら幸いです。

６／１０　修正

プロローグ　幼いころのとある一日

ＳＩＤＥ　？？？

とある木々が生い茂る山の中、少年は唱える。

「イグナシス、セットアップ」
「Ｓｔａｎｂｙ　Ｒａｄｙ　Ｓｅｔ　ｕｐ！！」

少年がそう呟くとその子の首から返答がされ、胸元のチョーカーが光り始めた。
そして少年は、目の前に現れた杖のような物を手にする。
それに続き、少年の体が光始めた。
その光はすぐに止んだが、少年の格好は変化していた。
半袖半ズボンで色は青と白だった服装は、黒のシャツとパンツそれに黒のロングコートに変わっていた。

「イグナシス、モードブレード」
「Ｂｌａｄｅ　Ｍｏｄｅ！！」

少年が静かに命じると、杖が変形し、光る『剣』の形をとった。

光の色は紅蓮、まるで灼熱の炎を連想させる色。

少年はそんな色を纏い変形した『剣』の柄を掴み、真っ直ぐ振り下ろす。
そしてすぐさま逆袈裟切り、続いて横一閃。
少年は『剣』を振る、振る、振る。
そして少年が一回転からの横一千を振り切ると、少年はまたも『

剣』に命じる。

「モードライフル」

「Ｒｉｆｆｌｅ　Ｍｏｄｅ！！」

それは単なる無骨な銃。

杖という物を元にした物を、ただ銃の形にしたと荒っぽく言えよう。

銃と言うのであれば……

何故ならそれを銃と言い表さなければ、賞賛されるようなそんな芸術性を感じさせる物だった。

少年はそんな『銃』を両手で構え空を飛ぶ。

あらかた開けた場所まで飛び上がると、少年の足元から光る円が広がり始めた。

その円にはビッシリと文字が描いてあるが、異国の文字なのか少年の国の文字ではなかった。

そんな円上、少年は『銃』を構え、何か覗くような体勢のまま命じる。

「イグナシス、バックアップを」

「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！！」

少年の呟きに答えるは、またしても『銃』。

少年は何かを見つめながら引き金を引く。

銃口からは紅蓮の光がほとばしる。

すると『銃』は使い手に報告するように喋る。

「Ｈｉｔ！！」

その報告を聞き、少年は続けざまに引き金を引く。
そして先程と同じように紅蓮の光が放たれた。

「Ｈｉｔ！！」

二回目の報告を聞き、少年はポツリ呟く。

「ラスト……」

誰に聞かすわけでもなく、少年はそう呟いて引き金を引き紅蓮の光を打つ。

「Ｈｉｔ！！　Ｉｔ，ｓ　ｐｅｒｆｅｃｔ（完璧です）」

林の中に響くイグナシスの声。
少年はイグナシスを肩に担ぎながら相方に返す。

「ありがとう、イグナシス」
「Ｎｏｔ，ａｔ　ａｌｌ　（どういたしまして）」

少年の感謝に、相方のイグナシスは返答しながら杖へと戻る。
これでランクは、どれくらいだと思う？　少年はイグナシスに軽く問いかける。

「Ａｂｏｕｔ『Ａ－』　（おおよそＡ－ですね）」
「ウーン、早すぎるね」
「Ｙｅｓ」

少年の意見にイグナシスは同意する。

「まぁ、成っちゃったんだからいいや」

「Ｉｔ　ｓｅｅｍｓ　ｔｏ　ｂｅ　ｍａｓｔｅｒ　（マスターらしいです）」

呑気そうに言う少年に、イグナシスは思った事を言う。

そんなやり取りを終わらせ、少年は気楽そうに喋る。

「取り合えず帰るから、戻って」

「ＯＫ！」

イグナシスがそう話すと少年の体が光り、元の服装に戻った。

その胸元には、十字架のチョーカーがあった。

「さてと帰りますか」

少年は静かに呟いて、山を後にした。

□■□■□■□■□■□□■□■□■□■□■□

少年は山を降りていく、途中凹んでいた三つのー自分が打ち抜いたー缶を拾い集めて、キチンとゴミ箱に捨てて家へ帰路へとついていた。

「うん？」

その途中、少年は目の端に気になるものをとらえる。
そしてその場、とある公園の前で立ち止まった。
ふと目を向けると、自分と同い年くらいの少女が、一人でベンチに座っていた。
それだけなのだが、少年は何故か少女の事が気になった。
その子は公園で遊ぶ訳でもなく、ただ俯いてベンチに座っている。

「どうしたの？」

少女に尋ねながら近づいていく少年、見ず知らずの相手であったが、気がついたら話し掛け近づいていた。

「ふぇ……」

少年の言葉で、顔を上げる少女。
それにより少年はキチンと少女の顔を見れた。

（高町……なのは……）

自らの知識で少女の事を思い出す少年。

「どうしたの？」

再び少年は少女に問いかける。今度は相手の目を真っ直ぐ見て。
そんな少年の態度に少女はポツリとしゃべる。

「あのね……」

少年の紳士な態度に気を許したのか、はたまた同い年だったからなのか、それ以外な理由があったのか少年は解らなかったが、少女は少年にゆっくりと自分と自分の家族の事を話し始めた。

お父さんが事故で大怪我を負った事。
お店があるからお母さんが働いている事。
お兄ちゃんはみんなを守るためにがんばっていること。
お姉ちゃんは怪我したお父さんの看病をしていること。
だから自分は一人で居なきゃいけないこと。
自分の家族の事を言葉足らずの口調で語る。
少女は全部話した。

すると少年はある事を思いつき、少女にその考えを話す。

「僕の家に来る？」
「ふぇ……いいの？」

思いもよらぬ意見に、少女は少年に問い返す。
そんななのはの問にも、少年はすぐさま返した。

「うん、いいよ」
「でも……」

迷惑になっちゃう。少女はそう考えて断ろうとする、幼いなりの我慢。
少年はそんな少女の考えを察して諭す。

「別に迷惑をかけても、いいんだよ」
「えっ……」
「寂しければ寂しいって言っていいんだよ。つらかったらつらいっ

て言っていいんだよ」
「で……でも」
少女は思わず涙ぐんでしまう。少女の中で迷いが生まれる。
そんな少女に少年は手を差し出す。
「友達になって、僕が君の助けになるから。そして一緒に居てあげるよ」
少年のその言葉で少女の中の何かが溢れ出した。
少女は思わず少年に抱きつき、涙を流しながら泣き声をあげる。
「よく一人でかんばったね、えらいよ」
そう言って少年は右手で少女の頭を撫で、左手で力一杯少女を抱きしめる。
公園には少女の泣き声が鳴り響く。
そこに居るのは泣いている少女と、それを慰める少年。
その光景は温かいものだった。
これが少女、高町なのはと少年、フェイト・アーウェルンクスの初めての出会いだ。

プロローグ　幼いころのとある一日（後書き）

こんな感じです。
感想、ご指摘がありましたら、お教えくださいお願いします。
まぁとりあえずヒマ潰し程度にかるーく読んでいってください。

始まりの朝（前書き）

体育祭、学年総合優勝したぜ！！
わーい、わーい

始まりの朝

「おいーッス」

フェイトが目を覚ますと、目の前にイケメンがいた。
彼は突然の事態に対して慌てずに、目の前の人物の登場ですぐさま状況を把握し、そのまま冷静に目の前の彼に一言告げる。

「何のようですか、神様？」

平坦な声による、全くもって無反応な態度の返事。
普通の人なら、ムッとしたであろう返事。
しかしそんな返事をされたイケメンはそんな事を気にしてないのか、両手を上げて首を振る。
その、いかにも『お手上げ』といったポーズを取りながら、先程のフェイトの言葉で自身が気になった点を指摘した。

「ＮＯー、ＮＯー、ＮＯー、だから何回も言っただろう、○▲※◆▽×◎だって」

イケメンの言葉の途中、フェイトの耳に認識出来ない音が聞こえる。
そんな現象に溜め息をつきつつ、フェイトはイケメンと話始める。

「だから名前を言っても、わかんねーよ。それより、まだ今回を併せて三回目だから」

何故だか、名前の部分だけなんと言っているかわからない。
その事実を伝えると同時に、今までの面会回数を相手に、フェイ

トに力を与え、転生させてくれた神様（本人否定）に伝えた。
一度目は転生の事を決めるために、二回目はフェイトが三歳の頃左目の事で、そしてこれで三回目。
しかしフェイトは相手が神様（仮）であろうと、しりごまず普通に話す、まるで友達と話す感じに。
ちなみに最初、丁寧に話しかけたのはからかう気持ちがあったからだ。

「つーか、ご機嫌だな。どうしたんだ？」

久し振りの訪問に対する疑問を、とりあえず投げかける。
そんなフェイトの態度に、神様（仮）はニヤニヤとイヤらしく笑いながら

「聞きたい？　聞きたい？　仕方がないなぁー、特別におS……」
「用件を早く」
「もう、い・け・ず」
「ちっ……」

腹が立つ事に似合っていやがる。内心で愚痴り、フェイトは舌打ちをする。
が、一応は恩がある相手なので、フェイトは渋々相手をする事にした。

「で、何の用？」

フェイトの言葉には愛想が微塵も感じられなかった。
しかしそんな事は気にせず、話し続ける神様（仮）

「いやー、今日から始まるから様子見にきた」

と言うと。フェイトは軽く首を傾げながら呟く。
そんなフェイトを、神は不適に笑いながら肘でつつく。

「もう、わかってるくせに。このこのー」
「あーうっとおしい。離れんかい！」

自分の体に肘を当ててくる神様（仮）に、フェイトは苛立ちをぶつけ引っ付いてくる神様（仮）を引き離し話を続ける。
一方引き離された神は、ニコニコと笑いながらそれを黙って引き離される。

「で、話を戻すけど。無印の事だろ、始まるの」
「そっそっ、今日ユーノ君やられるから」

神様（仮）の言葉を聞いて、フェイトは若干顔をしかめる。

「知ってて助けないのが、少し心苦しいな」

正直に気持ちを吐露するフェイト。
その心の内は、困っているのに傍観する事への罪悪感があった。
そんなフェイトの心情を察して、神様（仮）は彼の肩をポンポンと叩き話す。

「まぁこれは必然だから、ガマンしてね」
「あぁ、わかっている」

神様（仮）の言葉に対して、すぐさま返すフェイト。
そんな彼の返事は理解を示す物だったが、その声は少し沈んでいた。

「じゃこれで」
「帰るのか？」
「うん、一応これでも忙しいからね」

自身の質問に対しての素直な答えにフェイトはつっこむ。、

「よく言うぜ。遊んでて秘書さんに怒られてるくせに」
「違うアレは◎◆▽××※◆の照れ隠しさ」
「……それこそ違うと思うし、もう一回言うけど名前言われてもわかんねぇーからな」

あきれ半分、諦め半分と言った言葉を告げるフェイト。
そんな彼の言葉に、神様（仮）は溜め息をつきながら言う。

「全くわかってないねー、女心と言うものを」

そんな神様（仮）の反応に、これ以上は無意味だと思いそのまま流すことにしたフェイト。
「それで、どう力の調子？」

とりあえずその話しは終わり、神様（仮）は純粋な疑問を口にする。
そんな神様（仮）の質問に、フェイトは少し呆れ混じりに答える。
「いや微妙なチートを貰ったはずが、使えば使うほど普通にチートだと実感するわ」

自身の修行風景や戦闘の時の事を思い出しながら、フェイトは答える。

「そう？　でも最高クラスの○▲▽×※が転生させた者達とやり合ったら、君普通に死ぬよ」

残酷な事実を告げる神様（仮）の言葉。

その言葉の気になる点を、フェイトは指摘する。

「最高クラス？」

「そう、僕以下の○▲▽×※が転生させた者達だったら、まぁ難しいけど勝つことも出来るけどね」

「へーあんた偉かったんだ」

素直に驚くフェイトに対して神様（仮）は腰に手を当てて、盛大に胸を反らしながら、途轍もなく偉そうに告げる。

「なめないでいただきたい。○▲▽×※内でも序列第三位だ！」

そんな尊大な態度に、フェイトは興味なさそうに感想を言う。

「あっそ」

「反応薄いよー。かまってよー」

フェイトの冷たい態度に、神様（仮）はいじけながら話す。

そんな神様（仮）の態度をウザがるフェイト。

「あーうるさい、さっさと帰れ。ったく」

「もう、照れ屋なんだから」

「……」

「じゃあねー」

「……」

そう神様（仮）が言うと、フェイトの視界が段々とぼやけ始めた。

□■□■□■□■□■□□■□■□■□■□■□

「はっ」

勢いよくベッドがら飛び起きるフェイト。

辺りをキョロキョロ見回し、そうして確認したら愚痴を言い始める。

「たっく、あいつは、いっつも唐突だなー。たく」

フェイトは自分の夢の中に出てきた神様（仮）についてこぼす。

そして、壁に掛けている時計を確認しフェイトは呟く。

「学校行くか」

ここからフェイト・アーウェルンクスの物語が始まった。

始まりの朝（後書き）

未だにヒロインがでてこない、ダメじゃねコレ

設定（前書き）

ノリでＦａｔｅ風にしてみました。
つーか、もう微チートじゃねーし。ｗｗｗ

設定

名前　フェイト・アーウェルンクス

白髪碧眼（左目は虹彩異色症（ヘテロクロミア）で金色）　かっこいい：かわいいが　４：６　な顔

属性　中立・中庸

筋力　Ｃ　魔力　Ａ

耐久　Ｃ　幸運　Ａ

敏捷　Ｃ

神から貰った力は三つ

・魔導士の資質

最終的にはＳＳ＋になる。が努力しないとランクは上がらない。

・魔力量

上記に同じ

・希少能力（レアスキル）

？？？？？

デバイス

インテリアジェンスデバイス
イグナシス
普段は十字架のチョーカー
・対近距離用のブレードタイプ
・対中距離用のロッドタイプ
・対遠距離用のライフルタイプ
の3タイプ
一つだけ特殊な力がある

以上の三つ

また自然に虹彩異色症が発症してしまったため、サービスで左目が写輪眼へと変わる。
万華鏡写輪眼は失明はしないものの、使用時間、効力に応じて一時的に見えなくなる

転生のデフォルトスキルで
・主人公補正ーA
あらゆる現象に影響を与える。効果の優先順位は常に一位
効果は今のところ以下の通り
・とり
ここぞという時に全てのステータスがワンランクアップ
・鈍チン
女性関係時に察知系スキルが最低ランクまでダウン
・ギリギリ
イベント発生時に重要であれば重要であるほど到着が遅れる
(常になわけではない)
・フラグ
ある程度関わりのある異性と親密になるイベントが発生する
まれに初見時にも発動する

ここからは元［転生前］からもっていたもの

スキル

・秀才ーA

ほとんどの物事を努力すれば極められる。しかしその道の天才には勝てない。

・直感ーB

第六感が鋭く、余程の事が無い限り外れない。戦闘時に危険を察知する能力

・冷静ーB

ある程度の物事を落ち着いて対処できる

設定（後書き）

作者「いやー微チートといいながら、完全なチートになっちゃった。」
アーウェルンクス「少しは自重しようぜ」
作「無理だね、作者だもの」
ア「はぁー。あー、あと？？？？ってなっているのは何だ？」
作「それは秘密（知弦さん風）」
ア「ブサイクがやっても、ムカつくだけだからな。あと、転生前だけでも異常だな」
作「一般人レベルのチート的存在だもんね」
ア「それに、神から貰った力は三つってあるけど、実質、写輪眼とスキルの合わせて５つだよな」
作「気にしない、気にしない。よしそれじゃあ今回はここまで、さぁみんなも一緒にーー無〇の彼方へ　さあ行くぞ！ーー」

・作者は現実より逃避しました

ア「なんかもう無茶苦茶だな、おい。……こんなぶっ飛んでいる作者が作品ですが、皆様が楽しんでいただけたら幸いです。はい　つーか、なんで俺がこんな事を……」

始まる物語（前書き）

すいません、なんか微妙なできに……
すいません。

始まる物語

「ダルい……」

フェイトは愚痴をこぼしながら授業を受ける。
ここは私立聖祥大附属小学校のフェイトのクラス。
現在は４時間目の社会の授業を受けていた。
しかしフェイトは愚痴る。当たり前だ、転生前は全国上位の成績を残していたのだ。
だから小三の授業など、赤子の手を捻るように簡単なのだ。
なので

「ｚｚｚ～」

暇すぎて寝てしまうのは頷ける。
しかし隣に座る子が起こそうとする。これも当たり前か。
これらがフェイト・アーウェルンクスの日常だ。

□■□■□■□■□■□□■□■□■□■□■□

「将来か～～」

お昼休みの屋上、たくさんの生徒がお弁当を食べている。
そんな中のとあるベンチ、そこ座るなのはと友人のアリサとすずかもその例にはもれずに昼食をとっていた。
なのはは、たこさんウィンナーを頬張りながら呟く。
先程までの授業で話されていたことを思い出して、なのはは呟いたのだ。
そしてその事について、横に座る友人達に視線を移して話し合う。

「アリサちゃんとすずかちゃんは、もう結構決まってるんだよね？」
なのはの質問にアリサは親の会社を～。すずかは工学系で専門職～。と自分の将来について軽く語り出した。
得に迷う訳でもなく、普通に話すアリサとすずか。
そっか～。スラスラと話す二人の言葉を聞き、なのはの口からはため息が漏れる。

「二人ともスゴいよね～」
「でもなのはも、喫茶翠屋の二代目じゃないの？」
「うん、それも将来のビジョンの一つではあるんだけど。やりたいことも何かあるような気もするんだけど、まだそれが何なのかハッキリしないんだ」

そう言ったなのはは空を見上げていた格好から、下を見下ろす格好になる。

「あたし、特技も取り柄も特にないし」

そう悲観した瞬間、

ぺしっ。と水気を含んだ音が鳴る。

それはなのはの頬に向かって投げられた、レモンの切り身が出した音だった。
投げたのはアリサ。
アリサはそのまま、なのはにお説教を開始する。

「バカチーン。自分からそういう事言うんじゃないの」

「そうだよ。なのはちゃんにしか出来ないこと、きっとあるよ」
アリサとすずかの二人はなのはを窘める。
「それにあたしはなのはの夢、一つ知ってるよ」
「ふぇ？　夢？　私の？」
アリサの発言で彼女の方へ顔を向けるなのは。
思い当たる節が無く、何かあったかなー。と考えながらアリサの言葉を待つなのは。
そんななのはにアリサは、少々意地が悪い笑みを浮かべながら話す。
「フェイトのお嫁さん」
「……！！！！！！！／／／／／／」
アリサの発言で顔を真っ赤に変えるなのは。
その顔は、トマトや夕日のように例えられてもいい位に赤く染まっていた。
頭の中の方もオーバーヒート寸前、といった感じであり、なのはの口からは、うぅー。とか、あぁー。などの意味不明な言葉が漏れ出していた。
「ふむ、予想以上の反応ね」
「ふふ。なのはちゃん、お顔が真っ赤」
そんな友人の様子を二人は、片やニヤニヤと片やニコニコと眺めている。
「い、いやフェイト君は、あのその、なんて言うか……」

そんな状況が終わったのは、なのはが落ち着きを取り戻し、意思疎通が出来る言葉を喋れるようになってからだ。
それでもまだうまく話せずに、たどたどしい話し方になっていた。
「それにアレだよ。うん、フェイト君カッコいいし、頭もいいし、運動も出来るから、優しいし、それにモテるから、あたしなんて見てないよ」
なのはの口から出るは、幼馴染に対する回りの評価。
成績優秀、頭脳明晰、眉目秀麗。幼馴染の姿を思い浮かべると同時に出てくる言葉。
この言葉も、すでに小学生の勉強課程を修了しているという、幼馴染から教えてもらった言葉だ。
ちなみに、この時なのはの頭の中には品行方正という言葉は出てこなかった。
そんな天才と呼ばれる幼馴染を思い出し、同時に彼に思いを寄せると思う（ほぼ完璧に当たっている）クラスメイトの少女達も思い出す。
それと同時になのはは、ため息をついていた。
何言ってるのよ。そんななのはをアリサは飽きれた目で見ていた。
「あんた程、あいつに近い女子なんていないじゃない」
「ふぇ！？」
思いもよらぬ友人の言葉になのはは驚嘆の言葉が口から漏れる。
それと同時に、もう一人の友人からも教えられる。

「そうだよ、なのはちゃんだけだよ。フェイト君になのはって、名前で呼ばれている女の子」
「そ、そうなの？」
「そうだよ。フェイト君、私の事は月村って呼ぶし、アリサちゃんの事はバニングスって呼んでるもん」
「……へぇー、そうなんだ」

初めて知った情報に、なのはは相槌を打つ。
なのはの中では現在、天使の格好したなのはが四人ほど舞い上がっているのだが、からかわれるだろうと考えてなのはは必死に平静であろう努める。
そんな心中のなのはにアリサ達は静に告げる。

「なのは、あんたわかりやすいわね」
「えっ！？」

なんかばれるような事した？　なのははすぐさま考えてそれを直そうとする。
そんな中、すずかが教えてくれた。

「なのはちゃん笑顔になってるよ」
「ふぇ！？」
「しかもかなりのね」
「／／／／／／」

友人ふたりの指摘になのはは再び顔を真っ赤にした。

□■□■□■□■□■□□■□■□■□■□■□

時刻は夜

「あーあ、無茶苦茶しやがって」

暴れるバケモノが起こす惨状に、ため息をつくフェイト。
その声には覇気が微塵も感じられない声であった。
そんなフェイトをしり目にバケモノの近くで何かが光った。

「おおー、始まった」

この光景に、軽く鬱に入っていたフェイトも少しテンションがあがっていた。
目の前には桜色に輝く光の柱。
その光は時間と共に、光が強くなっていく。
そしてフェイトのテンションも同じように、どんどん高くなっていた。
そんな中、桜色の光の中からバリアジャケットを纏ったなのはの姿が現れる。

「よし、さっさと片付けろなのは！！」

熱心に応援するフェイト。その心はもちろん……

「じゃないと片付けが増える」

被害の影響ではなく、自分の手間の心配だった。
まぁ、少しは手伝うか。フェイトは肩に担ぐイグナシスを手に唱える。

「イグナシス、モードライフル」
「Ｒｉｆｌｅ　Ｍｏｄｅ！！」
銃とは呼べない銃を構えフェイトは指示する。
「イグナシス、バックアップ」
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！！」
既に封印の体勢に入っているなのは、そしてそれに突っ込もうとしているバケモノ。
「大丈夫だとは思うけど、一応はねー」
そんな事を呟きながらフェイトは引き金を引き、その銃から紅蓮の光が撃ち出された。

□■□■□■□■□■□□■□■□■□■□■□

ＳＩＤＥ　ユーノ

「くっ……」
目の前からジュエルシードの怪物が迫ってくる。
力を貸してもらっている女の子も、封印の体勢に入っているがギリギリのようだ。
くっ、ここは少しでも時間を稼がなきゃ。

ユーノがそう考え前に出ると。
ドッーン。と何かがぶつかる音がした。そしてそれにあわせて怪物も姿勢を崩した。
「リリカルマジカル、ジュエルシード封印」
「Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ、Ｓｅｔ　ｕｐ」
女の子の杖ーレイジングハートが変化する。
「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ．Ｒｅａｄｙ」
「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアルＸＸＩ封印」
「Ｓｅａｌｉｎｇ」
よし。僕は安心して……。
そこでユーノの意識は途絶えた。

□■□■□■□■□□□■□■□■□■□■□

「一応は終わったかな？」
フェイトはポツリと独り言を呟く。
「ついに始まった現実（ものがたり）が」
その目には強い意識が感じられる。
「微妙な力だけれでも」

何も握っていない左手を握りしめ

「頑張ってみんなを守っていこう」

そう独り呟いた。

始まる物語（後書き）

なのはの口調がムズい。
そしてグダグダになってしまった。
すんません。Ｏｒｔ

初めての次の日（前書き）

中々話が進まない。

初めての次の日

ＳＩＤＥ　フェイト

「ふぁーあ。眠い……」

フェイトは大きくアクビをした後ただポツンと呟く。

昨日は夜中まで事故処理をしていたのだ。

不自然な痕跡を消して、ソレっぽく事故の後に見せかけて、目撃者がいないかの確認を行ったのだ。

眠いのは当たり前である。

「今思えば、封絶って便利だよなー」

なにせ人払いに、遮音、さらには破損物の修復まで出来る優れもの。

昨日の件を思い返し、思わず口に出る。

「いいなー、封絶。ほしいなー封絶」

「何ぶつくさ言ってんのよ、あんたは？」

そんなフェイトの呟きを聞いてたのか、アリサが後ろから話かけてきた。

「あーバニングスだー」

フェイトはアリアをマジマジと見つめた後喋り始めた。

「……なぁお前封絶って使えるか？　つーか使えそうだな、うん使

えるな！　なんとなくそう思う」
「何いきなり、訳のわからない事言ってんのよ、あんたは」
「いやなんか寝不足で、軽くテンションがおかしいんだ。まぁ、気にするな、ＨＡＨＡＨＡＨＡ！！」
「明らかにダメそうに見えるけど……」

完璧に壊れているフェイトと、その異常なテンションにツッコムアリサはそうこう話している内に教室についた。
教室に入るとすずかが、こちらにに駆け寄ってきた。

「あっ、アリサちゃん、おはよう。それでね、アリサちゃん大変だよ！」
「どうしたのよ、すずか？」

あいさつの後、なにやら焦った様子で話していた。
フェイトは自分に関係ないと判断し、すぐに自分の席へと向かう。
そんなアーウェルンクスにすずか話しかける。

「おはよう、フェイト君」
「おはよう、月村」
「ねぇ、フェイト君も聞いた？」
「はい、聞きました」

何故だか慈愛に満ちた顔で優しく返すフェイト。
すずかも少し困り顔になる。

「私まだ、何も言ってないけど」
「ダメよ、すずか。今のコイツ、マトモな会話が出来ないもの」
「ナニヨー、失礼なー」
「じゃあ、私らと楽しく話でもする？」

「すいません、そしてお休みなさい」
アリサに誘われて、すぐに頭を下げて答えるフェイト。
「みんな、おはよう」
そんな中になのはが登校して来て、あいさつを皆にした。
そんななのはにフェイトは笑う。
「よし、なのはナイスタイミング」
「ふぇ！？　どうしたのフェイト君？」
「気にするななのは。ほら、イエーイ」
「イ、イエーイ？」
フェイトがいきなり右手を挙げたので、なのはも戸惑いながら右手を挙げた。
彼はその手をにハイタッチして、一気に話を進める。
「よし、後は任せたなのは」
フェイトはそう言って、自分の席に歩いて行った。
そんな背中を二人は見ている。
「結局何がしたかったんだろう、フェイト君？」
「さぁー？　なのははわかる？」
アリサはなのはの方を向く。
そこには、自分にの右手を見つめる友人が。
「なのは？」

「……」
「なのはちゃん？」
すずかも疑問に思い、なのはに問いかけるも反応なし。
そして、しばらく二人が見つめ続けると、やっと反応したなのは。
「……？　どうしたのアリサちゃん、すずかちゃん」
「あんたこそ、どうしたのよ。いきなり右手なんて見つめて」
「ふぇ！？」
「フェイト君に触って貰えて嬉しかったんだよねー、なのはちゃん？」
「あーなるほど」

すずかの答えに納得のいったアリサ。
なのははそんな二人に赤くなりながら話す。

「い、いや。別に久し振りにフェイト君の手に触れた、とか考えてないよ」
「思考だだ漏れよ、なのは」
「それだけ嬉しかったんだね、なのはちゃん」
「／／／／／／／／」
「それで、すずか大変って？」
「あっ！　それでね昨日の……」

□■□■□■□■□■□□■□■□■□■□■□

国語の時間

漢字について話す先生。
フェイトはぼーっとしながら、先生の……なわけじゃなく

なのはとユーノの念話を盗聴していた。

［まぁ盗聴っていっても、思いっきりだだ漏れなんだけどね］

心の中で呟くフェイト。

［まぁユーノも他に魔法使いがいるとは思っていなからかだろうけど］

そして二人の話が終わり、フェイトは

［寝よう……］

授業を聞かずに夢の中へと旅立った。

初めての次の日（後書き）

だからフェイト（真）がでてこない

対面（前書き）

今までは主人公はアーウェルンクスと表記していましたが、今回からはフェイトと表記し始めます。
ヤッパリなんか違和感があるんで

対面

「あぁー、あぁー、あぁー」

フェイトは目の前の惨状に思わず零す。

場所は神社の鳥居の上、その神聖なオブジェに腰掛けながら言う。

その惨状とは目の前にまぁ恐ろしい犬？　がいる。

そして近くには気絶している女性。

「めんどくせーなー。なんでささっと逃げねーかなー、たく……。はぁー」

短くため息をついて、胸元のデバイスであり相棒に視線を向ける。

「とりあえず、新しい力を試したいからロッドモードで」

その言葉を聞き、イグナシスは静かに主人と自身の姿を変える。

「Ｍｏｏｄ　ｗａｎｄ！！」

変化し終わり、イグナシスは主人に報告した。

その言葉を聞いてフェイトは笑いながら呟く。

「さぁてと、スーパーチートタイムと行きますか」

そしてフェイトは小さくその言葉を呟いた。

「Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒ、スタート」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

「コッチだよねユーノ君」

なのはは神社の階段を走りながら、傍にいるユーノに話かける。
ユーノも誰も居ないからと普通に話している。

「うん、この先の場所だよ、なのは」

そうして、やっと鳥居の部分にたどり着いた二人。
その二人が向かい合う一頭と一人を目にする。
なのはが今まで見たことがない、四つ目の巨大な猛獣。
それに対するは左手を前にかざし、仮面をつけた黒衣の少年。

「ふぇ！？」
「えっ！？」

なのはとユーノはその予想外の光景に固まってしまう。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

やっぱり、持ってきて良かった。フェイトはなのはとユーノが来たとき、そう思った。
現在フェイトが付けている仮面は、うちはマダラが付けているような仮面であり左目だけが見えるようになっている。
その目も写輪眼に変わっている。

「うんじゃあ、そろそろ終わりにするか」

そう言う声は変声機で変わっている。
なのは達の方を向き喋るフェイト、そんなフェイトに猛獣が迫る。
そしてその爪がフェイトの姿を切り裂いた。

「「！！」」

なのはとユーノのが息を呑む。
が、切り裂かれた当の本人は、落ち着いた雰囲気で話す。
その切り裂かれた姿はまるで乱れた煙のようだ。

「もう何回目だよ、いい加減学習しねー？　認識をずらしてるから、お前じゃ俺を傷つけられねーってのに」

さも平然とした声になのは達も困惑するばかりだ。

「な、何なんですか？」
「コレは魔法なのか？」

そんな二人にフェイトは内心笑いながら、だが表向きは少し真面目に話す。

「取り敢えず、少し待っていて下さい」
「あっ、はい」
急に変わったその丁寧な口調に、なのは思わず答えてしまう。
そうして向き直ったフェイトは、様子見している猛獣を見て呟く。
「スキルインストール、アブノーマル『言葉の重み』」
そして胸を張りながら、猛獣に命ずる。
「『お座り(オスワリ)！！』」
次の瞬間、なのは達は驚愕する。
獰猛そうな猛獣が、いきなり目の前の仮面の言うとおりにお座りしたからだ。
フェイトはそんな二人を気にせずにイグナシスを構える。
「封じろイグナシス」
「ＯＫ、ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ」
そう答えて、イグナシスは猛獣に向かい魔法の光を浴びせる。
すると猛獣の体からジュエルシードが出てきた。
ジュエルシードはそのままイグナシスの中へと取り込まれる。
「ジュエルシード、シリアル？？、封印完了」
そう言い終わるとフェイトは二人と向き合う。
頭の中で色々な事を考えながら。
そしてその場に沈黙が流れた。

「あ、あのー……」

最初にその沈黙を破ったのはなのはだった。

「そのジュエルシードはどうするんですか？」

恐る恐るといった感じに質問してきた。

フェイトはそんななのはの質問に肩を竦めながら答える。前々から考えていた理由を。

「別に、ただ危険だったから回収していただけなので、特に目的なんてありませんよ」

そんなフェイトの答えになのははさらに質問してくる。

「じゃあ、そのジュエルシードを譲って貰えませんか？」

「良いですけど、どうしてですか？」

フェイトの質問にはユーノが答え始めた。

（まぁ、知ってるんだけどね）

心の中でボソッと呟きながらフェイトは聞き続ける。

そして話を聞き終わると、フェイトは答える。

「いいですよ。では……はい」

そう言ってイグナシスからジュエルシードを取り出し、なのはに手渡す。

「ありがとうございます！！」

なのはの笑顔を見ながら、フェイトは帰ることを伝えると、最後になのはが自己紹介をしだした。

「あの私、高町なのは、って言います。コッチが友達のユーノ君です」

「あぁー、はい。私の名前はテルティウムと言います。まぁ好きに呼んでください」

「はい、テルティウムさん」

こうして、高町なのはとテルティウム（フェイト・アーウェルンクス）は別れた。

対面（後書き）

次回はやっとフェイト（真）を出す予定です。

ちなみにここで一言、

『予定は未定！！』

あー、「俺妹」面白かったなー

二人目との邂逅（前書き）

まさかの低クオリティー

あ！、いつもか

二人目との邂逅

なのはが魔法少女となって二週間が過ぎた。
ちなみにフェイトは街中で暴走した木の事件には、あまり関わらなかった。

ーやっぱりあそこは、なのはの成長するイベントだからねー

そう考えて最低限の補助と被害軽減しか行わなかった。
確かに少し落ち込んでいたが、なのはが成長するためとフェイトは余計な干渉は控えた。
まぁ友人としては慰めたのだが、

（何んでただ頭を撫でただけなのに、なのはは真っ赤にしたんだ？）

スキル主人公補正により鈍感になっているフェイトには、全くもってわからなかった。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

今フェイトの手元にはジュエルシードが二つ。
なのはがあまりにも疲れていたのをみるに耐えかね、先回りしてなのは達が気がつく前に回収したものだ。
そして、先程道端で拾ったものが一つ。

ちなみに文句は受け付けない。

コレにより今なのはが持つジュエルシードは五つ。原作よりも一つ少ない

まぁ多分、何だけどな。そうフェイトは内心苦笑する。

すでに転生して早九年。その間に学ばなければいけないことを学び、習得しなければいけないこと習得した。

そんなアブノーマルな日常を過ごすことにより、過去に見ていた原作は細かい所が抜け落ちていた。

その事に気がついた時は、すぐに覚えている限りの事を記録したため、もう忘れても問題無いようにした。

そうして今は親に頼まれた買い物の帰り道。

フェイトの目の前に、金髪の魔法使いが現れた。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

SIDE　フェイト・テスタロッサ

母さんから言われたジュエルシードの回収、そのジュエルシードの反応を頼りに飛んでいくと一人の男の子に出会った。

（あの子が持っているのかな？）

そう思い近づくと、その男の子が話しかけてきた。

「おい魔法少女」

その子の声はとても綺麗な声で金色と青色の綺麗な瞳。

そんな子の声に少し聞きほれていると、その子は続ける。

「魔法の秘匿はどうした」

そこで私は初めて、この世界には魔法が無いと思い出した。

「あ、コレは、その……」

「いいから、落ち着け」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

「落ち着いたか？」

「はい……」

目の前のいるフェイトを落ち着かせて『フェイト』は話し始める。

「まぁ取り敢えず、お前のことは誰にも話さないから」

「あ、ありがとうございます」

『フェイト』の言葉にフェイトは頭を下げる。

全く気をつけろ。腰に手を当てて軽く叱る。

「俺だからよかったけど、普通の奴なら危なかったぞ」

でも。フェイトは問い掛ける。

「なんであなたは、そんなに平気なんですか」

「あぁ、コレ？　性格だよ性格、俺対外の事には驚かねーから」
「はぁー」

ぶっちゃけ、知ってるからだけどな。
まぁとりあえず、ここは知らん振りだな

内心そんな事を考えながら話す

「まぁ取り敢えず気をつけなさい。お前みたいなかわいい魔法少女だど、キモイ変態に捕まったらどうなるか」

まぁ実際１００％つかまんねぇーけどな。

一応脅して注意しようとして『フェイト』は話す。
が、肝心の相手は何故か顔を赤くしている。

「どうした？」
「か、かわいいって……」

何故かどもっているフェイトに『フェイト』は肯定する。

「あぁ百人に聞いて百人が認めるくらいの美少女だ」
「／／／／／」

彼は黙ってしまったフェイトに問い掛ける。

「んで、何か俺に用でもあるの？」
「／／／はっはい、あのあなたが持っているジュエルシードを、渡して貰えませんか？」
「ジュエルシード？」

「これ位の、青色の石なんですけど」
そう言ってフェイトは手で示す。
あぁコレね、と『フェイト』はフェイトに渡した。
「えっ！？」
「どうした、違ったか？」
「あ、いえ。ありがとうございます」
そう言って、フェイトは頭を下げる。
「気にするな、どうせ拾いもんだから」
『フェイト』はお礼を軽く受けとり、下げてた頭を撫でる。
「ふぇ！？」
「あ、ごめん。つい撫でちゃった、嫌だった？」
なんだか、撫でたくなったんだが何故だろう。そう疑問に思う『フェイト』。
フェイトは撫でられた頭を触る。
「まぁいいや」
んじゃ帰るわー。そう言って、帰り始める『フェイト』。
「まぁ頑張れよー」
後ろ手に振りながら、家路についた。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

その日のフェイトのマンション

「どうしたんだい、フェイト？」

「あ、アルフ。ちょっとね」

心配してくれたアルフをよそに、私は横になる。

今日であった少年。

初めて出会ったのに、私の事を心配してくれた人。

初めて異性にかわいいって言われた。

初めて頭を撫でられた。

何故だか彼の事を思い出してしまう。

「ダメだ。母さんのお願いを叶えないと」

そう言って私は目を瞑り、眠りに入った。

二人目との邂逅（後書き）

基本フェイト（真）には表記しません、するのは最初くらいです。

月村家（前書き）

なんだか、なのはは難しい。
面白く書ける、他の作者さんに憧れます。

月村家

「ごめーん。待ったー、フェイト君？」

バス停前で待っているフェイトに対して声がかけられた。

その声に気がつき振り向くと、フェイトに声をかけた少女なのはの姿を捉えた。

そしてそのなのはの後ろからは一人の青年が歩いて来る。

なのはの兄である高町恭弥だ。

そんな二人が目の前に来てフェイトは答える。

「おはようございます、恭弥さん、なのは。それとギリギリだな、どうしたんだ？」

バス到着まで後、一分と言ったところでの到着。フェイトはその理由を尋ねる。

すると尋ねられたなのはではなく、恭弥が変わりに答えた。

少しイジワルな笑いを浮かべて。

「今日は大事な人と会うからって、頑張ってオシャレしてきたんだよなー、なのはー」

「にゃにゃにゃ！　お、お兄ちゃん！！」

「ハハハハ」

顔を真っ赤にして兄へと詰め寄るなのはと、そんななのはを見て笑う恭弥。

そんな二人を見てフェイトは首を捻りながら尋ねる。

「大事な人って、今日は月村とバニングス以外に誰かと会うのか？」
至極わからなそうな顔をしてフェイトは尋ねる。
そんな顔を見てなのはは、ひどく固まった笑みを浮かべる。俗に言う苦笑いである。
「あはははは、はぁー……」
「？？？」
そんな二人をよそに恭弥は、いつのまにかにやって来たバスに乗り込みながら、話している二人に声をかける。
「ほら二人共、早くしないと乗れないぞ」
「はい」
「はぁーい」
そう返事をしてなのはとフェイトはバスに乗り込んだ。
目的地、月村邸を目指して。
何故フェイトが月村邸へと向かっているのか、それは学校での話である。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「じゃあ週末に私の家でね」
となりの話声で目覚めるフェイト。

寝ぼけ眼のまま声の主の方へ視線を向けると、隣の席でアリサとすずかが話していた。
二人の事を確認した後、フェイトは少し考えて

「……寝よう」

再び机に伏せ就寝しようとした。
なのだが、とある声でその考えは遮られた。

「ちょっとあんた、起きなさいよ！」

元気よく女の子の声がフェイトを起こそうとする。
フェイトはその声を聞いて、眠い目を擦りながら起きる。

「……おいおい誰だよ、釘ミーボイスの目覚まし時計かけたの。今日は日曜日だぜ、おっちょこちょいだなー」
「誰が目覚まし時計よ！！　と言うか今日は平日で、今は休み時間よ。あんた何時まで寝てんのよ」

その声で伏せていた状態から、体を伸ばして起き出すフェイト。
そしてそれが済むと、アリサの方をキチンと見て親指を伸ばした右腕を向ける。

「ナイスツッコミだったぜ！！」
「あんたは人で、何してたのよ！！」
「寝起きのボケ」
「あんたって奴はー！！」

フェイトとの会話で怒るアリサ、そんなアリサを諌めてすずかも会話に参加する。

「落ち着いてアリサちゃん。早くしないと、なのはちゃんが来ちゃうよ」
「はぁー、そうね」
すずかが諌めることにより、アリサは冷静さを取り戻す。
「ねぇー、あんた今週末ってヒマ？」
「ああ、食っちゃ寝ライフを送るつもり」
こうは言っても実際は、魔法の修行を行うフェイトである。
そんな在るはずもない偽りの予定を教えるフェイト。そしてアリサはそれを聞くと、声を低くして話し始めた。
「それじゃあ今週末、すずかの家に来なさい」
「何故に？」
「ほら、最近なのは悩んでるみたいだから……」
「だから、相談乗るために私の家に呼んだの」
すずかも会話に混じり始める。
実に友人思いの二人である。
そんな二人に対してフェイトは、ちょっとした疑問を投げかける。
「理由はわかった。でも何故に俺？」
「あんたもいた方が、なのはも喜ぶから」
「いや俺が居ても変わらんだろう」
極々普通の事を言ったつもりのフェイトであったが、その答えを聞いてアリサはため息をついていたを、すずかは苦笑いを浮かべて

いた。

「あんたは、本当に……」

「なのはちゃん、がんばって……」

「???」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「と言うわけで、月村邸だ。ドーン」

「どうしたのフェイト君？」

「気にするななのは、気にしたら負けさ」

「う、うん・・・」

いきなりのフェイトの言葉に質問するも、よくわからない空気に飲まれてしまうなのはであった。

そんな話をしてる間に、扉が開いてメイドのノエルが出迎えた。

「恭弥様、なのはお嬢様、いらっしゃいませ」

そう言った後、ノエルはフェイトの方を向く。

「フェイト様ですね。私（わたくし）、月村家メイド長をやらせて頂いてる、ノエルと申します」

丁寧に頭を下げるノエルにフェイトは微笑みながらも挨拶をする。

「初めまして、フェイト・アーウェルンクスと申します。此度はお

招きにあがらせて頂きました」

そんな挨拶をした後、フェイト達は中へと通される。

「なのはちゃん、フェイト君、恭弥さん」

「すずかちゃん」

ユーノもなのはに合わせて鳴く（？）

「なのはちゃん、いらっしゃい」

続いてすずかの専属メイドのファリンさんが挨拶した。

ファランさんはフェイトの方も見て挨拶をする。

「初めまして、私、すずか様のメイドをやらせていただいてます、ファリンと言います」

と挨拶されたフェイトであったが、軽く頭を下げるだけですます。

（さすがに目の前にいるのに、主人より先にメイドに挨拶はね……）

そう考えて、フェイトは忍の真正面に立ち先程と同じように微笑む。

「お初にお目にかかります、私（わたくし）、フェイト・アーウェルンクスと申します。このたびはお招き頂き、ありがとうございます」

そんなフェイトの丁寧な挨拶に忍は少し笑いながら返してきた。

「初めまして、すずかの姉の忍です。いつもすずかがお世話になっ

てます」

そう丁寧に頭を下げた後、微笑みながら話してきた。

「もっと気楽にしてフェイト君、そんな畏まらずに」

「では、お言葉に甘えさせていただいて……」

そう言った後、フェイトは一息ついて

「あー疲れた、つーか間違ってなかった？」

いつもの通りに話始めた。

「あんた、なんであんなになってたの？」

いつもとは違う感じのフェイトに疑問を感じ、アリサは質問してきた。

「大概目上の人と初対面はだいたいあんな感じだ、で……」

いい終わるとすぐにファリンに向くフェイト。

「先程はすいません、フェイト・アーウェルンクスと言います、すずかさんには日頃からお世話になってます」

「いえいえ、大丈夫です」

そんな感じで話が纏まると、忍が立ち上がり恭弥の方へと歩いていく。

「恭弥、いらっしゃい」

「ああ」

そして、ノエルさんが尋ねてきた。

「お茶をご用意いたしましょう、何がよろしいですか？」

「まかせるよ」

「なのはお嬢様は？」

「あたしもお任せします」

「フェイトお坊ちゃまは？」

「俺もお任せで、後呼ぶんならお坊ちゃまは止めて下さい。なんだかくすぐったいので」

「かしこまりました、ファリン」

「はい、了解です。お姉さま」

そう言って出口に向かうファリン。

「じゃあ、私と恭弥は部屋にいるから」

「はい、ではそちらにお持ちします」

そう言ってノエルとファリンはお辞儀をして退室していった。

おはよう。そう言いあい、席に近づく。

そのまま、机に向かい椅子の上にいる猫をどかして、なのはとフェイトは椅子に座る。

そうして始まる会話、内容はもちろん恭弥と忍の仲についてだ。

「それにしても相変わら、ずすずかのお姉ちゃんとなのはのお兄ちゃんはラブラブだよねー」

「うん、お姉ちゃん恭弥さんと知り合ってずっと幸せそうだよ」

「家のお兄ちゃんはどうかな……でも昔に比べて優しくなったかな」

そう言いながら二人が去った後を見つめるなのは。
そんななのはにアリサが一言。
「いつかフェイトとああなりたいなぁー、て思ってる？　なのは」
「にゃにゃ、アリサちゃん」
「ふふふふ」
そんな楽しく会話している横でフェイトは
「にゃーーー！！」
猫と遊んでいた。

月村家（後書き）

久々の長文？

少女達の邂逅（前書き）

ついに『恋と選挙とチョコレート』が発売
黒エナも時間と金があれば……

うん？　Ｎｅｎｒｅｉ？　大丈夫、作者１６からやってるから！
！

少女達の邂逅

「そういえば、今日は誘ってくれてありがとうね」
「ううん、コッチこそ来てくれてありがとう」

互いにお礼を言い合う中、アリサがなのはの様子を見る。

「今日は元気そうね」
「ほぉ！？」

いきなりそう言われて、なのはは驚きの声を上げる。

「なのはちゃん、最近少し元気なかったから」

すずかはそう言いながら、なのはを心配そうに見る。

「もし何か心配事があるなら、話してくれないかなって。二人で話してたんだけど」
「すずかちゃん、アリサちゃん」
「まぁー、アイツはあんたが喜ぶかな？　って呼んだんだけど」

お茶を飲みながら指す先には猫と戯れるフェイト。
全くもってなのは達の会話を聞いていない。
三人はそのまま話し合いをしようとするが

キュイーーー！！

いきなりユーノの鳴き声が響く。
その状況を把握するため、なのは達が机の下を見ると

「ユーノ君！？」
「アイ、ダメだよ」

フェレット（？）のユーノが猫のアイに追いかけられていた。
二匹の駆けっこが止まらない中、ファリンが紅茶などをトレーにのせて持ってきた。
そんなファリンの足元で走り回る。

「あうわー」

足元で暴れる二匹に目を回し、体勢を崩し始めるファリン。

「あっ！　ファリン、危ない！！」

その状況を見たなのはとすずかの二人は急ぎ駆け寄るものの、それでもあと一歩間に合わない。

間に合わない、倒れる！！

二人がそう思った瞬間には、ソイツはファリンを支えていた。
右足一本で立ち、右手一本でトレーをしっかりと持ち上げて左の手足でファリンの体を支えている。

なんとも、凄い光景である。
そんな光景になのはとすずかも、つい見入ってしまう。
そんか二人にそいつは叫ぶ。

「コレキツいから、早く助けろ！！」

ギリギリの状態で絞り出す声に叱責されて、なのはとすずかはフェイトとファリンに駆け寄る。
そんな中、気がついたファリンが大声で謝りだした。
「ふぅわ〜！！　フェイト君、ゴメンナサーイ」

フェイトはようやく厳しい体勢から解放され手首などを回していると、なのは達が感心しながら聞いてきた。
「にしてもフェイト君、今のスゴいね」
「うん、気がついたらファリンのこと助けてたもんね」
「それにしてもアンタ、よくファリンさんのこと支えられたわね」
「まぁ、鍛えてますから」

ちょっとしたアクシデントに見まわれたものの、四人は揃って庭へと向かう。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

猫と戯れ話し合いながらお茶を飲む四人。
内容は勿論猫についてだ。
「しっかし、相変わらずすずかの家は猫天国よね」
「でも、子猫達かわいいよね」
「うん」

嬉しそうになのはに返事をするすずかだが、その後少し寂しそうな表情になる

「里親が決まっている子もいるから、お別れもしなきゃいけないけど」

「そっかー、ちょっと寂しいねー」

「でも、子猫達が大きくなっていってくれるのは嬉しいよ。」

「そうだね」

楽しく会話するなのは、すずか、アリサ。もちろんフェイトは混じらずに、猫とじゃれ合っているだけである。

そんなほのぼのとした一時に訪れる知らせ。

［あっ！？］

［なのは！！］

ジュエルシードの覚醒に念話で対応を考え出す二人。

［うん、すぐ近くだ］

［どうする？］

［えっーと……］

アリサとすずかがいる状態で、どう動くかなのはが考えているとユーノが閃いた。

そのままなのはの膝から飛び降りて、森の中へと走っていくユーノ。

「ユーノ君……！！」

「あらら、ユーノどうかしたの？」

「うん、何か見つけたのかも。ちょっと探してくるね」
「一緒に行こうか？」

心配して声をかけてきてくれたすずかに、なのははやんわりと断る。

「だいじょうぶ、すぐに戻ってくるから待っててね」

そう言ってなのははユーノを追って森へと走っていった。
そうしてなのはが立ち去った後にフェイトは立ち上がる。

「どうかした、フェイト君？」
「ああ、ヒマ潰しに森の探検。いいか？」
「別に大丈夫だけど……」

すずかに了承をとるフェイト、すずかもすぐに許可する。
そんなフェイトを変に笑いながら見るアリサ。

「……ふふふ。なのは、アンタも愛されてるわね」
「何か言ったか、バニングス？」
「いいえ～、何も～。ふふふ、ごゆっくりー」
「？？？」

アリサの様子に疑問を思いながらも、フェイトはなのはに続いて森へと足を向ける。
そうして暫く歩いている内にフェイトは結界に気がつく。

「中々な構成だな、少し小さいが無駄がない」

そう言って、フェイトは自分の首飾りーデバイスに話しかける。

「そして二人は今、ドンパチの真っ最中ってか？」
「Ｙｅｓ，」
あ～あ、と小さくぼやきながらフェイトは唱える。
「イグナシス、Ｓｅｔ，ｕｐ」
「Ｓｔａｎｄ，ｂｙ，Ｒｅａｄｙ，Ｓｅｔ，ｕｐ」
そう言って、黒一色のバリアジャケットを纏い、仮面をつけてフェイトは戦場へと飛んでいく。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

互いにデバイスを向け合うなのはとフェイト。
そんな膠着状態に巨大化した猫が動いてなのはがそれに気をとられる。
その一瞬のスキをフェイトはついた。
「……ごめんね」
小さくそう呟いて。
『Ｆｉｒｅ，』

バルディッシュがそう言って、雷撃をなのはに向かって放った。

「！！」

そしてそれに気づくも、一歩遅く雷撃がなのはに

「ふぅー、危ないですねー」

当たらなかった。

「テルティウムさん！！」

「はい、お怪我はなさそうですね」

振り返りなのはの様子を確認するテルティウム。

「増援？」

「いえ、似て非なるものです」

フェイトの疑問にテルティウムは素直に答える。

そしてそのままフェイトに提案を上げる。

「ここは取りあえず、私が封印してもよろしいですか？　あのままですと、被害がありますので」

「ダメ、私はジュエルシードを集めているから。封印は私が」

相も変わらずバルディッシュをテルティウム達に向けるフェイト。

そんなフェイトにテルティウムは話をする。

「ご安心ください、キチンと猫を傷つけずに封印し、あなたにお渡しますから。まぁ証拠としてコレを差し上げます」

そうしてイグナシスから何かが飛び出て、フェイトの目の前に浮かぶ。

「これは、ジュエルシード！！」
「はい、先日発見し封印したものです」
「「テルティウムさん！？」」

テルティウムの行動になのはとユーノが驚く。
そんな二人にテルティウムは振り返りながら話す。

「すいません高町さん、スクライアさん、私としてはキチンと管理してくれれば、どなたが持っててもよくて。それで今回はあちらにお渡しする事にしましたので」
「でも、アレは危険なもので！！」

声を大きくしてティリウムに喋るユーノ、テルティウムはそんなユーノとは逆に落ち着いて対応する。

「落ち着いてください、スクライアさん。それにそれはあなたにも言える事ですよ」
「くっ」

ユーノを軽く諌めて、テルティウムは再びフェイトへと視線を向ける。

「すいません、お待たせして」
「構わない、でも……」
「はい、お約束は御守りします」

そう言ってイグナシスを猫へと向ける。

「封じろ、イグナシス！！」

「ＯＫ，ｍｙ ｍａｓｔｅｒ！！」

テルティウムの声にイグナシスはそう返答して、何本か光の帯を猫へと伸ばす。

そのまま帯は猫を包み込んでいき、全体を包み込むとその塊はどんどん小さくなっていく。

そうして両手で持てる大きさへと変化して帯を戻すと、そこには小さな子猫が横たわっていた。

「それではどうぞ」

そう言ってテルティウムは帯の一本をフェイトの方へと伸ばし、ジュエルシードを渡す。

「うん、ありがとう」

「いえいえ」

軽く言葉を交わし、フェイトは飛んでいった。

テルティウムがその光景を眺めていると、後ろから声がかけられる。

「どうして……」

「それは先程も言いましたけど、キチンと管理してくれれば、私はどなたでもいいんですよ」

「でも……」

「すいませんが、私はコレで失礼させてもらいます」

テルティウムはそう言って飛び上がる。

「あの……」

「いいですか高町さん」

何か言いかけるなのはの言葉を遮り、テルティウムは話す。

「私はどちらの味方でもありません。なので手に入れたジュエルシードはその時、その時でどちらかに渡させて頂きます」

「……わかりました」

「それでは、また会える日を」

そう言ってテルティウムは飛び去った。

少女達の邂逅（後書き）

活動報告でもお知らせしますが、しばらく投稿が不定期になります。ご了承下さい。

休暇（前書き）

本当に久しぶりの投稿、みなさんに忘れられてないことを祈りつつ、

休暇

「なんてこった」

とある個室。
そこで一人の少年が悪態を付いていた。
少年の名はフェイト・アーウェルンクス。
銀色の髪、金色と碧色と左右非対称の瞳。
かっこいいと称するより、かわいいといったような言葉が似合う顔立ち。
そんな少年が顔を歪ませながら、絶望している。
その理由は先程までに行われた会話にあった。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「んっ……」

フェイトは誰かに髪をすかれているのを感じて目を覚ます。
何故だかいつもより重いまぶたを薄く開けて、ぼんやりとした視界をフェイトは認識する。
そこには頬を赤く染めながらも、穏やかな笑みを浮かべている幼なじみの顔があった。

【……な……のは?】

珍しく寝ぼける頭を働かせて、フェイトは現状を把握する。

【なのはの顔が……目の前……、俺は……横になっている！？】

フェイトはそこまで考えつくと、薄く開けていた目をパッと見開き身を起こす。

なのはの方はフェイトが目を見開いた瞬間に驚きのけぞっていた。

そのため、二人はぶつかり合うことはなかった。

そんな事は気にもとめず、フェイトは未だに半分寝ている頭を覚醒させて現状把握に努める。

【和室……だが俺ん家でも、なのはの家でもない】

「……ここはドコだ、なのは？」

とりあえずは状況を把握しているであろうなのはに尋ねる。

なのはの方も顔を赤くしながら、フェイトの問いに答える。

「えーっとね、ここは……」

なのはが答え始めた途端に部屋の襖が勢いよく開けられ、中にいたフェイト達に声がかけられた。

「ようフェイト！！　イチャイチャしてっか？」

入ってきたのは赤色の髪に若々しい顔、そして馬鹿ヅラ。

そのまんま『ネギま！』のナギ・スプリングフィールドである。

名前の方はさすがにナギ・アーウェルンクスとなっているが……

※ツッコミ不可

フェイトはそんな、たった今入ってきた父親に詰め寄る。
そして父親に向かって一言。
なのはの方は座ったままそれを見ている。

「全く久しぶりに帰ってきたと思ったら、すぐコレだ……。んで、今日は何やったの、父さん？」

ちょつとした尋問。
そんなふうに出会い頭、寝起きの息子に疑われナギは少しふてくされる。

「ヒドッ！　フェイト、昨日久しぶりに会ったのに、次の日にこの態度って。もっと何かあるだろう。ほら、こうなんて言うか」

ナギは昨日、ＮＧＯの仕事から帰ってきたばかりであった。
所属する団体名は『悠久の風』。
フェイトが初めてそれを知った時は、まさかね……と思っと思わず呟いてしまった。
そんな、久しぶりに仕事から帰ってきての父親の嘆願をフェイトは、

「御託はいいから」
「聞いて無いし」
「父さん、普段の行いを見れば自然でしょう。いったい何年、あなたの子供やってると思ってんの」

常日頃、とまではいかないものの事あるごとにイタズラーーと呼べるかいささか疑問をもつレベルだがーーを受けていてフェイトは、

現状の原因に迷わずに父親を疑う。
そんな我が子にナギはふてくされたまま話す。

「ありゃ殆どアルがやってんだってー」
「でもラカンさんと一緒に、悪乗りしてた時もあったよね」
「……まっ、いいじゃねぇかぇよ、一服盛ったぐらい。なっ！」
「何開き直ってんの。つーか一服盛ったって、睡眠薬かなんか？」
「晩飯にたんまり入ってたんだぜ！」
「何やってんの……」
「にゃはははは……」

父親の珍行動にため息をつくフェイト。それに対してなのはも同情的な笑みを浮かべる。
そんな独特な親子のコミニケーションを取っているとフェイトはとある部分に疑問を持つ。

「ちょっと待って、今晩飯って？」
「そうだが」

父親の肯定した言葉を聞いて、更なる疑問をぶつける。

「父さん、いつ睡眠薬入れたの？　たしか昨日はラーメンだったけど……」
「作っている最中だけど」
「……じゃあ、……まさか」

フェイトがとある答えに辿り着いた瞬間、また誰かが新たに部屋に入ってきた。
フェイト達はその新たに入ってきた人に視線を向ける。
プラチナブロンドのロングの髪に均整のとれた顔。

ナギの妻、アリカ・アーウェルンクス

※ツッコミ不可

そんなアリカは入り口で突っ立っているフェイトとナギに話かける。

「何をやっておるのだ？　ナギ、フェイトよ」
「母さん、昨日俺のご飯に睡眠薬入れたの？」

心から否定して欲しい。
そんな心境で、すぐさま母親に尋ねるフェイト。
そんなフェイトとは反対に淡々とアリカは答える。

「ふむ。たしかに入れたが、それがどうかしたのか？」

「……はぁー」

母親の答えを聞いてフェイトは深くため息をつく。
そんな息子の反応にアリカは頭に疑問符を浮かべる。
ナギはその横で笑っており、なのはも苦笑している。

フェイトの母、アリカ・アーウェルンクスは常識人である。
夫やその同僚が自分の息子に対してちょっかいを掛けるのを見ると、キチンと止めてくれる。
ただ一つ問題なのは、常識が所々抜けているのである。
夫であるナギが言うには、良いところお嬢様で箱入り娘として育てられたらしい。

会った当初は、デートの意味すらも知らなかったそうだ。
そんな生まれなため、直接的ダメージが無いイタズラにはナギの口車に乗せられちょいちょい手伝ってしまうのである。

「……どうせ、『朝起きたらビックリ！』ってさせようと思ったんでしょう」
「おっ、よくわかったな！」
「うむ、こういうのをサプライズと言うのであろう」

フェイトの指摘に、何も悪びれる分けでもなく肯定する二人。
そんな二人からフェイトはなのはに顔を向ける。

「ここってどこかの旅館だろう。つーことは、なのはは前もって知ってたのか？」
「うんん、私もフェイト君が参加すること今日知ったんだ」
「参加？　俺らだけじゃないのか」
「うん、アリサちゃんとすずかちゃんもいるよ」
「そうかーー」
【時期てきに見ても、原作の話か……】

そこでフェイトはとある事に気がつく。
そして自分の胸元を見ながら父親と母親に尋ねる。

「……父さん、母さん。俺がいつもつけてるチョーカーってさ、持ってきた？」
「うん？　チョーカーって十字架のやつか？　俺は持ってきてないぜ」
「私も持ってきてはいないぞ」
「うん、わかったありがとう。あと、トイレ行ってくるわ」

フェイトはそう言って部屋から出て行く。
そうして、トイレの中に入り個室に入り便座を上げずに腰掛け
「イグナシスがねぇ〜〜〜！！」
叫んだ。

休暇（後書き）

もう、勉強なんて嫌いだ。
全然出来ねー　ｏｒｔ

温泉！！（前書き）

学校は自主登校なのに、遊べない。
受験終わってるやつらを嫉みながら書きました。
はぁー、早く終わらないかな。
受験

温泉！！

※今回フェイト達の旅行のメンバーは高町家の人々、五人。月村家はすずかとメイドのノエルさんとファリンさん、アリサの家はアリサ一人、最後にアーウェルンクス家の三人の計十二人。
プラスにユーノ一匹？というメンバーだ。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

フェイトはトイレから出た後、嫌な予感がして林の散策をしていた。
ちなみにこの時、ユーノがなのは達の入浴シーンを見て顔をまっ赤にしていたのは別のお話。

林の中を軽くランニングするフェイト。その首元で銀色の装飾が鈍く光る。
それは旅館の土産屋で買った安物のチョーカーであった。
それをいつも着けているデバイスの代わりに首に掛けていた。

林は木々が生い茂り、地面から大量の根っこが出ていて走るのには適さない土地。
そんな場所を、フェイトは器用に走り進む。
その頭の中は、殆ど忘れかけている今日の事を考えていた。

（この場にイグナシスは無く、それは魔法が殆ど使えないことを指し示している。）

フェイトは一応はデバイス無しでも魔法は使えるは使えるのだがが、その効果は全く期待できない効力である。

（レアスキル『Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒ』は使えるが、まだ高レベルの力は使用できない。）

満足に使えるのは左目の写輪眼と己の肉体のみ。

そんな事が頭の中で廻って、そして最後に彼は結論づける。

「俺、知らねっかんな！」

辺りに静かに響く声。

誰も聞いておらず、誰にも聞こえない言葉。

そんな無責任な言葉を呟いて、フェイトは続けて愚痴る。

「……って言えたらなー。たく『Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒ』スタート」

フェイトはため息混じりに行動し始める。

ここら辺でいいな。とその場で立ち止まり、右手を上げる。その指は人差し指と中指だけを伸ばしている状態だ。

その状態から逆の手を使い、懐から紙切れを取り出し言葉を続ける。

「【力の変換】『【魔力】から【存在の力】へ』」

そう言って、手に持つ紙切れを辺りにバラまく。
その紙切れには【探索】【探査】【青色の宝石】【ロストロギア】【魔法】【ジュエルシード】など色々な言葉が記されていた。
そんな紙切れが地面に落ちていき、もう地面に着くか着かないか、その瞬間に紙切れは燃え始めた。
その炎は地面に落ちず、ゆっくりと周り始めやがて紅蓮の紋章が描き始める。
力の名は『自在法』。
存在の力を操ることでこの世を意のままに動かす力、この紋章は力の流れの象徴であり、また効果を増幅するための装置でもある『自在式』だ。
デバイスが無いフェイトは、それを紙に書いた言霊でサポートする。
そうして唱える呪文は、準備の割りにいい加減なものだった。

「マタイマルコカヨハネ四方配して寝床の夢を破るお化けをこづかれよ」

その言葉を発するや否や、紋章の縁から薄い紅蓮の波紋が平面に沿って広がっていく。
１０メートル程進むと溶けたように見えなくなるが、フェイトは力が広がっていくのを感じる。
どんどん広がり、金髪(フェイト)の魔法使いや茶髪(なのは)の魔法使い、使い魔(アルフ)にフエレット(ユーノ)を通り抜けるが誰もその事に気がつかない。

（まぁ、存在の力を感じられなきゃ、気づける訳ないか）

そう思って手を下ろす。
それと同時に紅蓮の紋章も消える。

「さぁてと、見つけたはいいがどうするかな。たしか原作では……」

遥か昔の、もう消えかけている記憶を掘り返して、今日の夜に起こるであろう事を精密に思い返す。

「……あれ？」

そこで彼は、なのはがフェイトに名前を教えてもらう回と言うのを思い出す。

それは今後の為に必要な事だ。

そのような重大の事実を思い出し、彼の口から声が漏れる。

「あれ？　コレって、探査の術式無意味じゃね？　……無意味だな、うん」

自らの問いに、自ら答えるフェイト。そしてそのまま、思わず膝を着く。

（コレまでの労力って一体……）

そんなふうに落ち込むフェイトであった。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「そうだ、帰ったらキチンとノートを読もう」

そんな決意を胸に、気を取り直して歩く『フェイト』。
先ほどの自在法で目的地は把握している。
そうやってしばらく歩いていると、金色の髪が遠目に見えた。
『フェイト』はお目当ての木の下に歩み寄る。
木の上の少女の方も気がついて、顔をこちらに向けている。

「よっ、魔法少女！　久しぶり、元気か？」
「君は……」

『フェイト』の姿を見て、フェイトは木から降りる。
彼はその姿を眺めて、降りてきたフェイトにいきなり話しかけた。

「大丈夫？　なんだか痩せてない？　ちゃんと食べてる？　体温かくして、しっかり寝て、規則正しい生活送るのよ」
「へっ！？　え、え？　わ、わかりました」
「うん、よろしい」

ふざけながらも心配する『フェイト』。
そうして彼はフェイトの頭を撫でる。

「え、えっ？」

撫でられたフェイトはいきなりの事で戸惑いだした。
その頬は赤くなっていく。
そんなフェイトに彼は優しく話し始める。

「やっぱり……。目の下にちょっと隈が見えるな、寝不足なのか？
それに少し肌荒れが目立つぞ、キチンと食べてないだろう」

そう言う『フェイト』の左目は赤い瞳で、中に巴紋が浮かんでい

る。
うちは一族に伝わる写輪眼だ。
そんな、写輪眼の洞察眼で冷静に観察した彼は指摘する。
そして図星を衝かれたフェイトは、つい答えてしまう
「あ、いや、キチンとは、食べてないかな……」
こちらに来てからの食事を思い返し、自分自身で見ても不健康な食生活を送っているとフェイトは判断する。
そんな彼女の食生活を聞き、『フェイト』は眉をひそめる。
「ダメだぜ、キチンと食べなきゃ。何事も体が資本なんだから、なっ」
「は、はい」
「よし、約束だ！」
何気ない会話、彼はそんな取り留めもない会話を続ける。
「なぁ、魔法少女」
「あ、あの……」
「うん？」
そんな『フェイト』をフェイトは遮る。
その顔は少し赤くなっているが、何故か写輪眼を使っても『フェイト』はその事に気づかない。
そんな『フェイト』に彼女は少々詰まりながらも話す。
「名前で……　呼んでくれないかな……？」
「名前？」
「うん。魔法少女じゃなくて……　ちゃんとした名前で」

いつもの自分だったら、まったく気にしないような事を言い出すフェイト。
そんな事も気がつかずに彼女は頼む。
そんなフェイトのお願いに、彼は笑いながら答える。

「いいよ」

短い返事で、『フェイト』は快く承諾した。
その言葉を聞いて、良かったー。とフェイトは思わず呟いた。
そして『フェイト』はからかい半分で彼女に尋ねた。

「お名前をお教えて頂けますか、かわいいお嬢さん」
「かわいい……／／／」

頬を染めるフェイト。
『フェイト』の言葉に照れながらも、彼女は教える。

「私はフェイト、フェイト・テスタロッサって言います。それであなたは……」
「……ははは、まさに運命（フェイト）だな」
「えっ！？　あ、あの名前を……」

いきなり笑い始めた『フェイト』に戸惑いながらも、フェイトは名前を再度尋ねる。
そんな問いに彼は、

「フェイト」
「はい」
「だからフェイト」

「はい？」
「フェイト」
「あのー？」

自分の名前を連呼するのに疲れたのか、眉をひそめるフェイト。
そんな様子を見て、『フェイト』もやっとキチンとし始める。
笑いながらも謝罪の言葉を述べ、彼は事情を話す。

「はは、悪い悪い。いやはや、偶然って面白いなって」
「？？？」

落ち着きを取り戻し、『フェイト』はにこやか笑う。
その顔にフェイトは又も顔を赤くする。そしてこれにも又、気がつかずに名乗り上げる。

「フェイト。フェイト・アーウェルンクス、それが俺の名前。ね、偶然って面白いでしょう」

『フェイト』の言葉にフェイトはポツリと呟く。

「……あなたも、フェイト？」
「ああ、そうだよフェイト」

小さな呟きに、彼は律儀に答えた。
その言葉を聞いて、フェイトは彼に尋ねる。

「ねぇフェイト」
「何だい、フェイト？」

彼の言葉を聞いて、フェイトは小さく笑い出す。

それに合わせて彼も笑う。

「ふふ、本当だ。何だか面白いかも、フェイト」

「そうだろう、だから俺も笑っちゃったんだ。フェイトもわかるだろ？」

「うん。フェイトの気持ちが、ちょっとわかったような気がする」

微笑ましい光景。

お互いに笑いながら、話し合う二人。

「うん、やっぱりそっちの方がいいや」

「うん？」

「笑ってる方がかわいい」

「えっ！？／／／／ あの、その……」

照れたフェイトが言葉に詰まっていると、『フェイト』のポケットから音楽が流れてきた。

「お、ちょいと失礼……」

そう言って『フェイト』はポケットから携帯を取り出し、電話に出る。

「もしもし、うんうん。あー、わかったよ。あー、はいはい」

そんなふうに話して、『フェイト』は携帯をしまう。

「わりぃな、親から帰って来いって……」

「……うん、いいよ」

『フェイト』の『親から』と言う単語を聞いて、フェイトは顔に翳りが出た。
彼はそんな彼女の表情を見て、自らの首に掛けていたチョーカーを外し、それをフェイトに差し出した。

「えっ！？」
「あげる、安物だけど記念に」
「えっ、でも悪いよ」

『フェイト』の差し出す手を見ながら、首を振るフェイト。
その顔には困惑の色が見て取れた。
そんな彼女に彼は右手を取って渡す。

「いいの、いいの。また会えるように、っておまじない」
「おまじない？」
「そう。せっかくできた友達に、もう一度会えるようにってね」
「もう、友達なの？」
「ああ、何かを一緒にやったら、もうそれで友達だ」

そう言って『フェイト』は右手を差し出す。
フェイトも少し戸惑うも、自分の事を真っ直ぐ見ている彼を見て、その手を握りかえした。
そうして二人は笑いあって握手する。

「フェイトが何のために行動してるのか知らないけど、無事に終わるように応援するよ。頑張って！！」
「……うん、ありがとう」
「じゃあ、またなフェイト」
「うん、またねフェイト」

そう言って『フェイト』は宿へと走り出す。
フェイトは、そんな彼の背中を見ながら思う。

（また、会えるかな）

そう考えながら、彼女は首にネックレスを着けた。

温泉！！（後書き）

センター？

んなもん、余裕でアウトだったわ

温泉！！　2（前書き）

長らくお待たせしました。
ようやく投稿できた、二ヶ月も延びちまった。

温泉！！　2

「はっ、はっ、はっ」

フェイトと分かれた後、真っ直ぐに宿へと向かうフェイト。
その途中川へとたどり着き、その側に人影を見る。
その人影を見て、彼は息を整えながら近付いていく。
そんなフェイトに対して人影は後ろ向きのまま声をかけてきた。

「やぁ、フェイト君」

その言葉を聞いて、フェイトは苦笑しながら返事をする。
『足音だけで、その人物を特定する』その技能を褒めながら。

「さすがですね士郎さん、腕に鈍りはないようで」
「はっはっ、向かしとった杵柄だよ。それに、……もう体の方はガタガタさ」

士郎と桃子の後ろに辿り着き、フェイトは木にもたれ楽な姿勢を取る。
それを見計らったように、士郎は後ろを向いたまま話し始めた。

「本当、君には感謝してるよ」

何が……。とは指さずにただそれだけを士郎は言う。
フェイトも、士郎のその言葉だけで何の事か察し

「どうしたんです？　いきなり」
「何、改めてお礼が言いたくてね」

士郎の言葉はどこか懐かしむような感じであった。
そんな士郎の話しにフェイトは笑いながら返す。
「俺は何もしてませんよ。みんな父さん達のおかげです、俺は何もやってません」
（そう、俺はただ父さんに頼んだだけ）
内心、そう継ぎ足したフェイト。しかし士郎は、それでも……。と謝辞を述べる。。
「もちろんナギさん達にも感謝しているが、君のおかげで私達家族はまた一つになれたんだ。改めてお礼を言うよ、本当にありがとう」
いつの間にか振り向いていた士郎は、頭を下げながらそう言った。
自分の四分の一も生きていない少年に対してでも、それはとても真剣な態度だった。
その隣に立つ桃子も、フェイトに向かって真っ直ぐ立って微笑みながら礼を述べた。
「あなたが居なければ、なのはにずっと寂しい思いをさせてたわ。その事で恭弥もミユキも、そしてなのはもちろん私も、貴方には感謝してるの。ありがとう」
二人に感謝の言葉を述べられて、少し落ち着かないフェイトは、苦笑しながら答える。
「もう、いいですよ。父さん達も、あなた方が笑ってくれればそれで……。俺も、ただそれだけで。」

フェイトはそう締めくくり、体を起こす。
そうして士郎と桃子に対して真っ直ぐ向き直り、笑いながら話す。
「んじゃあ、そろそろ行きます。父さんに帰ってこい、って言われてるんで」
そう言ってフェイトは、また宿に向かって走り出した。
その場に残った二人は、彼が来る前と同じように川を眺める。
「……本当に不思議な少年だよ、まるで大人を相手にしているようだ」
「それでいて、なのはの事も大切にしてくれてる」
「……ふっ、彼にならなのはを」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「何なのよ、アイツ。昼間っから、酔っぱらってんじゃないの！！
気分悪！！」
歩く廊下の先から聞こえてくる声、フェイトはその声を目指して歩いていく。
そうした先にお目当ての人物達を見つける。
彼は何故か騒いでいる彼女達に声をかけ同時に尋ねる。
「どうした、バニングス？　そんなイライラして。カルシウムでも

とっとけよ、風呂上がりの牛乳で」

笑いながら話しかけるフェイト。

アリサはそんな彼を睨みつける、その視線は、ギロッといった効果音が似合いそうな視線であった。

フェイトはそんな視線に多少たじろきながらも、あくまで穏やかに問いかける。

「一体全体、どうした？」

アリサの視線に若干顔をひきつらせながらも、フェイトは今度は三人に尋ねる。

そんな彼の質問に、これまた顔をひきつらせながらなのはが答えた。

「うん、ちょっとね……」

苦笑いを浮かべながら、彼女はそう答えた。

その顔には少し翳りが見える。

そうか……。と何かを察しフェイトが呟くと、なりを潜めていたアリサの怒りがまた姿を表した。

「と言うか、あんた一体所々ほっつき歩いてたのよ！！」

「なんだよ、噛みつくなよ。たく。……アレだアレ、ちょっと山の中を走ってたんだよ、ちょうどいいかなー、って思ってよ」

正直に答えるフェイトにアリサの言葉は続く。

「全く！　居なくなるなら居なくなるって言いなさいよね。すんごい心配したんだから、なのはが」

「ふぇ！！」

苦笑い気味にアリサの話を聞いてたなのはだったが、いきなり自分の名前が出てきて、思わずといった感じで声を洩らす。

そんななのはをよそに、今まで静観していたすずかも笑いながら、

「ナギさんにフェイト君がランニングにいった、って聞いた時は凄い悲しそうだったんだよ」

「そうそう、見捨てられた子犬みたいだったんだから」

「す、すずかちゃん、アリサちゃん！！」

二人のからかいに、なのはは声を上げて止めようとする。

二人の顔には笑みが浮かんでいて、なのはの顔は赤くなっていく。

女三人集まればナントやら。フェイトは頭の中でそう考えながら三人に告げる。

「まぁ、取り敢えず俺は風呂に行くから。んじゃあ後で」

なのは達に一方的に告げて、フェイトはその場から立ち去る。

そんなフェイトになのはは何か言いたそうだったが、何も声をかけずにその場はそれだけで終わった。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「んじゃあ、お休みフェイト」

「お休みフェイト、しっかり休むのだぞ」

「ちょっと待って、何かがおかしい」

夕食を終えて、時刻はすでに夜9時過ぎ。
フェイト達子供は、さすがにもう寝る時間と言うことで切り上げよう。そう言ってナギとアリカは自室へ戻ろうとしていた。
すでに恭弥と忍は二人共部屋におり、士郎と桃子も先程部屋に引っ込んでいた。
今現在この部屋にいるのはアーウェルンクス夫妻とフェイト、なのはにアリサすずかにメイドのノエルとファリンだけだ。
そんな、部屋を出て行こうとするナギとアリカをフェイトは止める。

「俺も行くから」
「どこに？」
「いやどこにって、父さん達の部屋」

よくわからない、といった感じで疑問顔のナギにフェイトは丁寧に答える。
そのフェイトの返答を聞いて、ナギの顔は疑問顔となる。
背後に「えっ！？」と言った擬音が聞こえてきそうな顔であった。
そんな父親に、フェイトは問いただす。

「何で、そんな顔するの父さん？」
「お前は、ここで寝るのかと思ったから。つーか、コレ決定だから」

自分の問いかけに対して思いもよらぬ答えに、今度はフェイトが疑問顔になる。

「えっ！？　何それ、聞いてないんだけど」
「ああ、言ってねーもん」

「……おい」

父親の適当な答えに、フェイトは思わず荒々しく返す。
そんなフェイトの態度はどこ吹く風、といった顔をするナギ。
そんな父親の説得は諦め、フェイトは母親のアリカに頼もうとそちらに顔ん向ける
しかしアリカも、フェイトの方を申し訳なさそうな顔をして見ていた。

「まぁ、大人は大人であんだよ、いろいろと。」

諦めてナギの方を見るとそう言われたフェイト。
そしてある事に気がつき、ナギに彼は吐き捨てる。

「ちっ、エロ親父」
「へっへーん、言ってろ言ってぶべっ」

負け惜しみに言った言葉も、のらりくらりとかわされる、がその前にナギはアリカに頭をぶたれた。

「子供相手に何をやってるか、まったく。すまぬなフェイト、こんな夫で」
「いや、もう慣れたし。気にしないで母さん」
「……お前ら何気に酷いぞ」

そんな不毛な会話を終えて、アリカ達は部屋へと戻っていく。
そんな姿を見ながら、フェイトは寝室となる部屋へと向かう。

「何やってたの？」
「うん？　世間話」

「うそ言いなさい。ナギさん達の部屋、行こうとしてくせに」
「聞いてたんじゃん」

不毛な会話だ。フェイトはそう思い、さっさと布団に入ろうとする。
そこで彼は疑問が出てきたので皆に尋ねる。

「なぁ、俺の布団は？」
「無いわよ、そんな物」
「おい……」

フェイト達子供が寝る部屋には、布団が川の字にしかれている。
そしてそこにはそれぞれ、なのは、すずかそしてアリサと言った順番に寝ていて、それ以外には布団は無い。
もう一つの部屋にはノエルさんとファリンさんの布団である二枚の布団。こちらにもフェイトが寝るための布団は無い。
新手のイジメかコレ？　と内心ため息をつくフェイト。

「あんたの布団はそっち」

そんな事を考えている彼にアリサが彼の布団を指差す。
彼女が指し示すはすずかを挟んだ向かい側。アリサが示したのはなのはの布団であった。
それをじっくり眺めるフェイト。
その間見つめられたなのはは顔を赤くするも、フェイトが寝るスペースを開けようとする。

「んじゃあ、さっさと布団をしくか」

フェイトがじっくり五秒程眺めた後にそう結論づけるも

「布団はもう無いわよ」
「何！？」
アリサの話にフェイトは驚嘆する。
そして直ぐにフェイトは部屋の襖を開けるが、中には幾つかの浴衣しかなかった。
「ちっ、仕方がない父さん達の部屋に……」
「多分もう部屋の鍵閉めてるよ。それにみんなで話合わせてるから、他の部屋もそうだよ」
無慈悲な答えをすずかより告げられ、フェイトは肩を落とす。
「……士郎さんと桃子さんは、俺に感謝してんじゃなかったのかよ」
新たな案に対してのすずかの答えに、自分が既に詰んでいる事愚痴るフェイト。
そんなフェイトに対してアリサは告げる。
「あんたは諦めて、なのはと一緒に寝なさい」
「……はぁー」
「何でそんな溜め息なんてつくのよ。イヤなの？」
何故だか盛大に溜め息をつくフェイトに対し、アリサは額を寄せながら問う。
そんなアリサに対してフェイトは呆れ顔で話す。
「俺をからかうのは良いけどよー、そのためだけになのはと一緒に寝かすって、なのはが可愛そうだろう……、ってどうした突っ伏し

て？」

しみじみと語るフェイトは途中、枕に顔を埋めているアリサに問う。

その頭の中は『みんなで寄ってたかって、俺なんかからかって楽しいか？』といった事が考えられていた。

そんな彼の考えが解ったのかたのか、アリサはそのままの状態でブツブツと愚痴る。

「……いや、流石にね、今回はやりすぎかな？　と思ったわよ、流石に。だってほら、答え出てるじゃない、なのはを見てみなさいよ。小学生でも判るわよ、小学生だけど。でもまさか、まさか此処までとは……。」

枕に顔を付けながら喋るアリサにフェイトは若干引く。

そんな事はつゆ知らず、アリサは勢いよく顔を上げ

「よし、もう決めた！！　すずかこうなったら、とことん手伝うわよ！！」

「うん、私もそれがいいと思うよ」

復活したアリサの問いにすずかも力強く返す。

「なのはも、こうなったら意地でもこの鈍感男を落としなさい、良いわね！！」

「は、はい」

アリサの怒涛の勢いに、なのははつい返事を返す。

そんな三人をよそにフェイトは、付いてけねー。とぼやきながら襖の浴衣を全て出し、それにくるまり横になった。

温泉！！　2（後書き）

程度が低いのはおなじみという事で……

温泉！！　3（前書き）

タイトルが思い浮かばない！！

温泉！！　3

「行ったか……」

襖が閉められた音を確認し、フェイトは浴衣を退けながら身を起こす。

「……よし」

行くか。と呟いて立ち上がるフェイト。

そのまま着替えようと考えた時に、彼はとある事に気がついた。

「俺の着替え、別の部屋じゃん……」

フェイトはナギ達と一緒に寝るつもりだったので、自身の荷物をナギ達の部屋に置きっぱなしにしていたのだ。

しかし別の部屋で寝ると知らされたのは寝る直前だったので、自身の荷物を持ってくるのを忘れてしまっていたのだ。

どうしようか……。と考えたのは一瞬、すぐに彼は動いてたら暖かくなると判断し襖に手をかける。

「おっと、そうだ」

襖を開けようとする直前、彼は気配の事に気がつく。

なのは達は小さい結界を張り出て行ったが、勿論の事直ぐに解かれてしまっている。

ノエルさんには気がつかるだろうな、と考えたフェイトはすぐに目を閉じ唱える。

「『Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒ』スタート」

唱える言葉は切り替える為の言霊。フェイトはこの言霊を唱えて、頭の中を切り替える。

そうして頭の中に浮かべるは魔人の道具。

「無気力（イビルブラインド）な幻灯機」

唱え終わったフェイトの体を何かが囲う。

軽く体を見渡して、自分の状態を確認してフェイトは部屋を出た。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「やっぱり、少し寒いな。」

正面玄関から出た途端感じた寒さに、『フェイト』は自分の肩を抱きながらはこぼす。

爪先を地面に打ちつけて靴を履き、軽くストレッチをしながら考える。

「（別に今回は何もする事無いけど……）」

一応わねー。とぼやきながら『フェイト』は走る。

一気に林の中に入った後、彼は遠くから力を感じる。

「始まったか。こりゃあ、ちんたらしてられないな」

そう小さく呟いて、彼はまたも言葉を紡ぐ。

「ディレイ」

『フェイト』がそう呟いた瞬間、彼の走るスピードが上がった。

そうして加速した『フェイト』は、ものの数分で湖のほとりへと辿り着く。

そこでは白い魔導士（なのは）と黒い魔導士（フェイト）が戦いあっていた。

そんな二人の姿を確認した『フェイト』は、すぐさま辺りを見回し他の二人の位置を確認する。

そうして四人の位置を確認しながら、『フェイト』は念のため『ぬらりひょんの畏』を発動した。

先に発動していた『無気力な幻灯機（イビル・ブラインド）』と併せて、今の彼の姿は見えず、また存在は認識されずらくなっている。

そのような状態で『フェイト』は二組の戦いを眺め始めた。

なのはとフェイト、ユーノとアルフ。

その戦いはユーノ対アルフはともかく、なのは対フェイトは見るからにフェイトが有利であった。

「やっぱり経験の差かねー」

そんな事を呟きながら『フェイト』は、まじまじと二人の戦いを見続ける。

そうやって『フェイト』が見始めてから十分程過ぎたあたり、ついに二人の戦いに決着がついた。

フェイトがなのはの首元にバルディッシュの刃を突きつけている。

そんな状態で身動きが取れないなのは、そんななのはとは対象的にレイジングハートはジュエルシードを取り出し、フェイトはそれ

を受け取った。

「先、帰るかー？」

二人のやり取りを眺めながら一人呟く『フェイト』。

そんな『フェイト』を余所に話は進んでいく。

「名前、あなたの名前は……」

「フェイト、フェイト・テスタロッサ」

弱々しく尋ねたなのはに対して、フェイトは淡々と答える。

そんなフェイトの返事を聞いてなのはは驚く。

「え！？　フェ、フェイトって……」

そんな風に固まっていたなのはを置いて、フェイトはアルフを連れて去っていった。

その後ろ姿を見るだけしか出来なかったなのは。

『フェイト』はそんななのはに念話で話かける。

（お疲れ様です、高町さん）

（えっ！？　テルティウムさん？　居たんですか？）

（はい、隠れてました。それですいません、いきなり）

いきなりの念話に驚くなのは。そんななのはに『フェイト』は尋ねる。

（お疲れの所申し訳ないんですが、一つ質問よろしいですか？）

（はい、良いですけど……）

何だろう。と少し緊張するなのは。
そんななのはに『フェイト』は一気に尋ねる。

（高町さん、あなた下着の上に何か穿いてます？）
（にゃ！？　な、何々ですか、いきなり／／／／／）

思いもよらぬ質問に、なのはは顔を赤くして返す。
そんななのはとは対象的に『フェイト』は冷静に返す。

（いえ、空を飛ぶのに下着のままだと下から見えるので。まぁ、ちょっとした忠告です。今回は夜なので良かったですが、昼間だと困りますからね）
（あ、ありがとう、……ございます／／／／／）
（いえいえ、それでは……）

要件を済ませ宿に戻ろうとする『フェイト』。
そんな彼になのはが尋ねる。

（あ、あのテルティウムさん、少し良いですか？）
（？　何でしょう）

質問されるとは思っていなかった『フェイト』は、何を聞かれるか。と考えながら聞いた。

（フェイトちゃんとお話するには、どうすればいいのか判らなくて……）

なるへそ……。内心そう呟きながら、『フェイト』はじっと考える。
そうして数秒程して『フェイト』は返す。
（やっぱり、真っ直ぐ語りかけるしかないと思いますよ）
（……そう、……ですよね）
『フェイト』の答えを聞いて小さく返すなのは。
そんななのはに『フェイト』はテルティウムを演じ話す。
（まぁ私に出来る事があるなら、出来るだけ手伝うので遠慮せずに言ってください）
（はい、ありがとうございます）
行くか。
そう思い『フェイト』はその場を後にする。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「随分な夜遊びだな、なのは」
「！？　フェ、フェイト君、起きてたの！！」
「お前が出て行くのを感じてな」
あの後、なのは達より早く帰りついたフェイトは、フロントに置いてある椅子に座りなのはの帰りを待っていたのだ。
そして遅れて帰ってきたなのはに、フェイトは言った。

その心は、夜遅く出歩く事に対しての注意であった。
内心、人の事は言えねぇがな。とは考えたものの、そんな考えを表情に出さずに彼は話す。
椅子から立ち上がり、入り口に立ちすくむなのはに近づいていく。
「ユーノの散歩にしては、遅すぎると思うが？」
我ながら役者だな。
なのはに尋ねながらフェイトは考える。
一方のなのはは落ち込みながら謝った。
「ごめんなさい……」
「……まぁいい、今度からこういう時には、書き置きぐらい残しておけよ」
「……うん」
「じゃあ終わりだ」
「えっ？」
反省しているなのはに、フェイトはそう言って部屋に帰ろうとする。
そんなフェイトになのはは尋ねる。
「怒らないの？」
「何で？」
なのはの問いに、首だけ振り返りながらフェイトは返す。
そんな彼になのはは続ける。
「だって、こんなに遅い時間に出歩いてたし……」

理由を喋るなのはの言葉は、だんだんと小さくなっていく。
そんななのはの態度に、フェイトは小さく笑いながら答える。
「お前が意味なく人に心配かける訳ないからな、理由があるんだろう？　それに、最近遅くまで出歩いてるしな」
「知ってたの？」
「ランニング中に、よく見かけてる」
そう喋りながらフェイトはなのはに向き直り、じっと見つめる。
いきなりフェイトに見つめられ、なのはは何も言えずに固まってしまった。
そんな彼女を気にせず彼は教える。
「なのは、お前髪汚れてるぞ。風呂入ってこいよ」
「えっ！？　う、うん……」
自分でも気づいたのか、フェイトの言葉に素直に返事をするなのは。
しかしなのははその場から動かず、じっとフェイトを見つめ続ける。
何だ、どうした？
突っ立ったまま動かないなのはを疑問に思い、フェイトは尋ねる。
「どうした、一人じゃ入れないとかか？」
冗談だろ。と続けようとしたフェイトであったが、その前になのはが頷く。
マジで！？　内心そう叫ぶフェイトになのはは言う。
「ちょっと……、怖くて……」

あー。フェイトは呟きながらエントランスにかけられた時計を見る。
現在時刻は午前二時過ぎ。
草木も眠る丑三つ時に近い時間で、小学生で女の子のなのはが怯えるのにも、フェイトは納得できた。
どうすっかなー。フェイトはじーっと考える。
流石に綺麗にするの我慢しろってのは、女の子には酷だよな。と考え
結局、しゃーない。と呟いてフェイトは尋ねる。

「俺と入るか？」
「えっ！？」

フェイトの思いもよらぬ言葉に、なのはは呆気にとられてしまう。
しかし彼の言葉の意味が分かったのか、すぐに顔を真っ赤にして俯いてしまう。
嫌ならいいんだぞ。と慌ててフェイトは言うが、それに反してなのはは頷く。
えっ！？　と今度はフェイトが固まってしまった。
そんなフェイトに、なのはは見つめながら言う。

「……ダメ？」
「ぐっ……」

上目遣いのなのはにときめいてしまったフェイト。
落ち着け俺、落ち着けー。自分にそう言い聞かせながら話す。

「……じゃあ取りあえず、なのはの着替えを取りに行こう」
「……フェイト君のは？」

「俺は汚れてないし、第一着替えは父さん達の部屋だからな。じゃあ、行くぞ」
「……うん」
そうして二人は一回部屋へと戻った。

温泉！！　3（後書き）

一体いつになったら、温泉編が終わるのか
それは作者にもわからない。

温泉！！　４（前書き）

ようやく温泉編が終わった
そして今回はシリーズ最長です

間違いなどありましたら、ご指摘ください。

温泉！！　4

「……入るか」
「……うん／／／」

現在、フェイトとなのはは露天風呂の入り口に立っていた。
ユーノは部屋に置いて来ているため、ここにいるのは正真正銘二人だけ。
二人の格好はフェイトは腰に、なのはは胸元までタオルで隠しているものである。

「でも、露天風呂なんてあったんだね」

親から全く聞かされていなかったためか、実際に見て驚くなのは。
そんななのはにフェイトは説明する。

「ここは予約制なんで、昼間や夜は無理なんだよ、だから知らされてなかったんだろう。まぁ、俺らが大人数ってのもあるかもしれないが……」

最後の方は推測で終わらせたフェイト。
そのフェイトの説明を聞いて、なのはは心配そうに聞く。

「勝手に使って、大丈夫なのかな？」
「ああ、そりゃ問題無いと思う」

頭をかきながらフェイトは続ける。

「エントランスに書き置きを残しておいた、この時間帯だと流石に

誰もいなかったから。まぁ多分、それで大丈夫だと思う。それよりさっさと風呂入ろうぜ」

フェイトはそう言って洗い場まで歩いて行く。その後ろになのはも着いていく。

端に積み上げられている桶を手に取り、フェイトはなのはに言う。

「久し振りに髪洗ってやるよ。座りな」

「……うん、お願い／／／」

なのははフェイトに言われたようにイスに座る。

フェイトはなのはの後ろに立ち、シャンプーを手に出して髪を洗う。

昔と同じように丁寧に、優しく。

「どうだ、痛くはないか？」

「うん、大丈夫だよ」

それだけで会話は終了し、また二人の間に沈黙が流れる。

しかしそれは気まずいようなものではなく、むしろ居心地の良い空気であった。

「洗い流すぞ、目つぶれ」

そんな空気の中、なのはの洗髪も終わり泡を洗い流すフェイト。

なのははフェイトの言うことを聞いて目を瞑る。

フェイトはそんななのはの頭に、桶に貯めた水をかける。

その水により頭に付いていた泡は粗方流される。フェイトはさらになのはの頭に水をかける。

そうやって完全に頭から泡が流された事を確認して、フェイトは

なのはに告げる。
「終わったぞー。体は自分で洗えよー」
そう言ってフェイトはなのはから離れた席に座り、自分の体を洗い始める。
しかしなのはも座っていたイスから立ち上がり、フェイトの隣の席へと歩いて来た。
「何で？」
「……ダメ？」
「……好きにしろ」
短く交わされる会話。
それもすぐに終わり二人の間にまた、居心地の良い沈黙が流れる。
そんな中で二人は体を洗い終わり、そのまま温泉へと入っていく。
腰に捲いてあるタオルを取りながら、フェイトはなのはに注意する。
「……タオルはとっておけよ、さすがにマナーは守らなきゃ」
「……う、うん」
なのはもフェイトの言う通りにタオルを取って、露天風呂へと入っていく。
フェイトはそのまま奥まで歩いていき、縁へともたれる。
なのはもフェイトの方へと歩いていき、彼の隣へと腰を降ろす。
そうして、二人でゆっくりと温泉に浸かる。
「……俺が言いたいのは、一つだけ」

静まり返った中で、フェイトは口を開く。
「何やってるかとか、危ない事するなとかは、まぁあんまり言わない」
「……」
紡がれる言葉に、なのはは黙って耳を傾けるだけ。
フェイトもそんななのはに対して話し続ける。
「ただ、最後まで自分の意志を貫け」
「意志？」
「ああ」
黙って聞いていたなのはだったが、疑問を感じた部分をフェイトに問いかける。
「お前が何をやりたいのか、何をしたいのか。その思いを貫くために、最後まであきらめるな」
「……」
「お前が今やりたいと想っている事は、そう言う類の事なんだろ？」
フェイトがそう尋ねるとなのはは喋る。
「フェイト君は凄いね、何でもお見通しだね」
なのはの賞賛に、フェイトは短く否定し喋る。
「何でもお見通しって訳じゃない、なのはの事だけお見通しなだけだ」
「……何だか恥ずかしいな／／／／／」

「今更だろ」
空を見上げるながら言うフェイト。
そんなフェイトとは対象的に、なのははうつむきながら話す。
「フェイト君」
「なんだ？」
「ちょっとだけ、フェイト君から元気貰っていい？」
「いくらでも」
「ありがとう」
そう言ってなのはは、お湯の中でフェイトの手をそっと握る
フェイトの方も何も言わずに、その手を握り返した。

「……どうしょうコレ」
温泉に浸かりながらフェイトはこぼす、その肩にはなのはの頭が寄りかかっている。
そしてそのなのははと言うと、
「スー、スー……」
夢の中へと旅立っていた。
流石に限界だったのか、フェイトが気がついた時には既にこの状態であった。

このままでは完璧に二人共風邪をひく。
なので現状を打破するために行動するしかない。
そう考えてフェイトは考える。

誰かを呼ぶ。
現在は誰もが寝てる時間、第一人を呼びに行ったらなのはが溺れる。
なのはを起こす。
今さっき寝たのだから簡単そうだが、なのはの年齢と現在時刻を考慮して無理だとフェイトは判断した。

どうする俺、どうする？
頭の中で幾つもの考えを出しては否定し、フェイトは考え続ける。
そうして幾分かたって、フェイトは深呼吸しながら心を静める。

「落ち着け俺、相手は九歳、俺も九歳」

自分に言い聞かせるようにぶつぶつと喋るフェイト。

「そうだＹＥＳロリータ、ＮＯタッチ。うん？　あれ？　コレって違くね」

そんな事で、十分近くかかりながらも覚悟を決めて、フェイトはなのはを抱き上げた。
そこで更なる衝撃的事実に気がつくフェイト。

「……体、拭かなきゃ……」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「ん……」

何だろう？　なのははは隣に寝ている誰かの動きで目を覚ます。
寝ぼけ眼で見える物は、銀色の髪に整った顔。
それだけで自分の目の前にいる人物を把握する。

「フェ！？　フェイトくっ」
「……ん～？……」
「……」

驚いたなのははは、ついつい名前を叫んでしまうのを必死に押しとどめた。
それは瞬間的に思考し、現状をできるだけ維持したいと思い至ったからだ。

「……」
「スー、スー」

そしてそのかいあってか、フェイトは未だ夢の中にいた。
そんなフェイトを見つめるなのは。
なのははそれだけで十分幸せを感じられる。
一緒の布団で寝るなんて、いつ頃ぶりだろ。
自分の幼なじみを観察しながら、なのははそんな事を考えていた。
そんな事をしていたら、なのははドコからか視線を感じ辺りを見回す。

そうして彼女は、微妙に開いた襖を見つける。
そこから覗く二対四つの瞳。
そこにはニヤニヤとした笑みを浮かべるアリサと、ニコニコとした笑みを浮かべるすずかであった。

「あ、こ、コレは。その……」

見られていた事に気がついたなのはは、勢いよく起き上がり弁解を始める。
しかしその言葉は恥ずかしい場面を見られた事による羞恥で、しどろもどろになっていた。
そんななのはを見ながらも二人は一向に入ってこずに、ただなのはを見ているだけである。
しかしなのはが一向に動かないので、アリサがようやく口を開いた。

「ヌフフ、あたし達の事は気にせずに、まだフェイトと寝てていいわよ」
「アリサちゃん、私達がいたら寝にくいよ」

アリサの言葉に対してすずかが言うも、その顔は満面の笑みを浮かべていた。
そんな感じで会話とはあまり言えない会話をしていたら、なのはの隣で寝ていたフェイトが目覚めた。
眠い目をこすりながら、彼は会話に加わる。

「……何やってんだ、お前ら？」
「あーほら、起きちゃったじゃない」

フェイトが喋るとアリサが残念がった。

アリサの事を不思議に思いながらも、彼は二、三度まばたきをして意識を覚醒させる。
そしてアリサはフェイトに興味津々といった感じで尋ねる。
「いったいどうしたのよ。昨日はあんな事言っていたのに、起きたら一緒の布団で寝てるし」
そんなアリサの問いにフェイトは素直に答える。
「いや、昨日って言うか今日な、なのはの事運んでたら服捕まれて、どうしても離さないから仕方なく一緒に寝たんだよ。ふぁ～あ」
アリサの問いの答えには、あくびも混ざっていた。
昨夜遅くまで起きていた事による寝不足であった。
ちなみになのははフェイトと久しぶりに一緒に寝れた事により興奮し、それにより眠気を感じていなかった。
「運んだ。ってどうして運んだの？」
「……」
今度は一緒に聞いていたすずかが尋ねる。
そこでフェイトは嫌な感じがして黙った。
しかし何かを察知したアリサは、すぐさま追求の鉾先をなのはに向ける。
「なのは、あんた昨日コイツと二人で何したのよ」
「えーっと……」
アリサの追求になのはは顔を俯かせる。その顔は赤くなっており、

羞恥により言えないと示していた。
そんな中すずかが何かに気がつき、なのは達が寝ていた布団の、その枕を取り上げた。
そうして気がついた事をアリサに報告する
「アリサちゃん、枕が湿ってるよ」
「なる程……」
すずかの報告を聞き、アリサはなのは達の事を悟る。
そうしてフェイトとなのはに向き直り、何か含んだ笑みを浮かべていた。
「あんたら昨日、一緒にお風呂に入っていたわね」
「……はぁー」
「／／／／／」
アリサにズバリ当てられて、フェイトはため息をつき、なのはは赤い顔を真っ赤にする。
そんな二人を見ながら疑問を口にする。
「でも運んだって事は、途中からなのはは寝てたの？」
ごく当たり前の疑問を抱くアリサ。
そのアリサの質問を聞き、内心焦り始めるフェイト。
「そういえば……」
そう言ってなのはは何かを思い返そうとする。
すると何かに気がついたのか、なのはの顔が見る見るうちに赤くなっていく。

そんな状態で、なのはは恐る恐る彼に尋ねる。

「フェ、フェイト君、もしかして……」

何かの間違いであってほしい。そんな祈りを込めたなのはの質問であったが、フェイトのセリフでみるも無惨に砕け散った。

「……悪い、夜遅かったし、……誰も居なかったから……。でもその、出来るだけ見ないようにはしたから」

その言葉を聞き、なのはは昨日露天風呂で寝てしまった自分の体を拭き、服を着せた人物を理解した。

そして同時に、なのはの口から悲鳴が上げられる。

「にゃーーーーーー！！／／／／／」

たかが九歳、されど九歳。

なのはがいくら幼いと言っても、既に立派な女の子。

自分の裸の隅々を他人に、しかも自分の最も好きな相手に見られた。

その事実はなのはの乙女心を打ち砕くのに、充分すぎるものであった。

そんななのははフェイトの両肩を掴み激しく揺する。

「責任、責任取って！！」

なのはの物凄い剣幕に圧倒されるフェイト。

さらに激しく揺さぶらているため、軽く混乱状態であった。

そんなフェイトに、なのはは詰問の手を緩めずに続ける。

「フェイト君、フェイト君！！　責任を取ってなの！！」
「わかった、取るから、取るから落ち着け、なのは」
以前として詰め寄るなのはに、フェイトは思わずそう口にする。
そのフェイトの言葉を聞いてなのはは揺さぶるのを止めて、フェイトに問うなのは。
「絶対、絶対だよ」
「分かってるよ、約束してやるよ」
あ～、気持ち悪い。
寝不足な上、激しく揺さぶられたため、フェイトは激しいにめまいに襲われていた。
そんな不快感ＭＡＸなフェイトとは対象的に、なのはは顔を両手で抑え一人妄想の世界へと旅立つ。
「約束……、婚約……、結婚……」
一人ブツブツと喋るなのはを置いておいて、フェイトはなのはが悲鳴をあげるや否や、すぐに端っこに避難した二人に近づく。
「助けてくれてもよかったんじゃねーの」
少しばかり嫌みを込めた言葉にアリサは、ふん。と鼻をならしながら返した。
「乙女の純情を踏みにじるのが悪いのよ」
そりゃー、裸見たのは悪いけどよー。と愚痴るフェイトに、アリサとすずかは共にため息をつく。

「……普段も遠慮なく踏みにじってるってのに」
「……なのはちゃん以外も被害者は大勢いるのに」
口々にそう呟く二人に、フェイトは頭を抑えながら尋ねる。
「何か言った？」
「「何も」」
そんな三人とは別に、一人夢世界に浸るなのは。
「か、帰ってきたら『ご飯にする？　お風呂にする？　そ、それとも……』キャーーー／／／／／／」
こんな状態が、大人達が来るまで続いた。

温泉！！　４（後書き）

五月病ならぬ六月病により勉強も執筆もやる気が起きない

報告&日常（前書き）

此処に来て新キャラ投入

報告&日常

「とりあえず、みんなの気持ちを代表して言うけど……」

黒髪の、虫すら殺せないと言う言葉が似合う、実におとなしそうな少年がそんな前振りを言う。

少年の前にはフェイトがおり、少年の次の言葉を待つ。

そんなフェイトに少年は告げる。

異性のハートをがっしり掴むような、とてもにこやかな笑顔を浮かべて一言。

「爆発しろ、リア充」

「何だよいきなり、怖ぇなー」

黒髪の少年の一言に、フェイトはすぐさま言い返した。

時刻は十二時過ぎ。

自分の席に弁当を出して、昼食を取っていた時の事だ。

フェイトはその時間を一人の少年と過ごしていた。

少年の名前は葵　瑞樹。

フェイトと同じ転生者である。

と言っても原作を知らず、また本人の夢も極々普通の職業なので、もう一人と同じく介入する気は全くもって無かったのである。

そんな相手にフェイトは、先日温泉宿で起こった出来事を話していた。

そしてついうっかり露天風呂の下りを話してしまった後、瑞樹に暴言を吐かれたのであった。

「いやいや、同年代の美少女達と温泉行ったあげく、その内一人と混浴？　一つ聞くけど、それドコのエロゲー」
「リリリカルなのはは、リアル（アニメ）だよ」

瑞樹の言葉に対して、冷静に返すフェイト。
実の所、原作は確かにエロゲーだがな。とフェイトは心の奥底では呟いてはいたのだが。
そんなフェイトに対して瑞樹は、意味深な笑みと言う言葉が実に似合う笑みを浮かべながら会話を続ける。

「それで、高町さんとは？」
「何が？」
「いや、どうなったの？」

相も変わらずそっち方面は鈍いフェイトに、瑞樹は笑みを浮かべ続けながら尋ねる。
その笑みは、下心を感じさせるような笑みである。

「どうも何も、特に何もないが」

そんな瑞樹の笑みには触れず、フェイトは聞かれた事だけ淡々と話した。
そんな態度のフェイトを見て、未だに二人の間に進展がないが事を把握し、溜め息をつきながら瑞樹はぼそりと呟く。

「……今度『バオウ』か何か、至近距離でぶち込もうか」
「何で！？」

聞こえていたのか、フェイトは瑞樹の言葉に驚愕を露わにする。
その心は、何故そんな事をする？　といったことを考えていた。

そんなフェイトの内心を理解したのか、瑞樹はすぐさま答える。
「いや、主に高町さんの為に。刺激与えたら、治るかなと」
「???　何で、なのはが出て来るんだ。それに俺は何処もおかしくわないぞ」
「……恐るべきは、主人公補正と言うべきか」
鈍感&唐変木はデフォだな。瑞樹は内心そう結論づける。
まぁいいや。と瑞樹は気分を切り替えて、気にかかっていた話しをする。
「それで、先程のやり取りは？」
いきなり真面目なトーンに変わるも、フェイトはその空気に対応し話合いは続く。
ちなみに瑞樹が言うやり取りとは、先程の休み時間なあったなのはとアリサの会話であった。
「たしか『何悩んでるか知らないけど、本当に困った事が合ったら言いなさい。いいわね』だったっけ。うーん実に青春臭いセリフだ。ちなみに、コレって原作には？」
瑞樹の質問に、フェイトは目をつむり記憶を掘り起こす。
「いや、似たようなのなら合った。と言ってもずっと一人で悩んでいたなのはに、アリサがキレる。ってのだけど」
その言葉を聞いて前のめり気味だった瑞樹は、背もたれに体重を預ける。
そのまま椅子の前脚を上げ、後ろ脚だけでバランスを取りながら

話続ける。
「成る程、話が変わったか。高町さん、悩んでるようには見えなかったし、いつも通り三人で行動してるし」
瑞樹は屋上へと行った三人娘を思い出しながら話す。
そしてすぐに意味深な笑いを浮かべ、フェイトに言う。
「よかったね、色々と手を打ったかいいあって」
「……何の事だ？」
瑞樹の言葉にフェイトは短く返答する。
しかし、その返答は少し遅れるものであった。
そんなフェイトに瑞樹はニヤニヤとした、少し嫌らしい笑みを浮かべて、目の前の素直じゃない親友をからかう。
「またまた、惚けちゃって。高町さんの相談を受けたのもそうだけど、バニングズさんをとりなしたのもお前だろ」
「見てたのかよ」
苦虫を潰したような表情を浮かべながら、フェイトは瑞樹の言葉を返す。
そんなフェイトの態度に気分よくしながら、彼の質問に答える。
「いや、答えを出す者（アンサートーカー）だよ」
「出た、チート」
あらゆる答えが瞬時に浮かぶ能力、そんな瑞樹の能力をそう評するフェイト。
しかし瑞樹の方も負けず劣らずに、フェイトの能力について愚痴

る。

「そのチート能力に対して勝ち越してるお前は、更なるチートってことになるよ」

稀にやる模擬戦を思い返し、瑞樹は溜め息をつきながら愚痴る。

「出る答え、出る答え全て潰され、稀に答えすら出なくなる。お前はどこのクリア・ノートですか？　コノヤロー」

「人の気も知らないで。あれはあれで、すんごいキツいんだぞ」

互いのオーバースペックに文句を言い合う二人。

そんな会話をしていたフェイトと瑞樹。

そんな二人の間に、一つの放送が入る。

『あー、マイクテスト、マイクテスト。みんな、聞こえてる？』

校内放送でそんな声が聞こえてきた途端、二人は話の内容が変わった。

「あのバカ。早弁してたと思ったら、何やってんだ」

「まさか、小学校で授業中に弁当食うのを見るとは思ってなかったよ」

自分らと同じ三人目の転生者の事を、そう称したフェイトと瑞樹。

内心溜め息をつきながら、瑞樹へと視線を向ける。

瑞樹はその視線を受け、肩をすくめる。

どうせ何時もの事だろう。

内心そう結論付けたフェイトと瑞樹。
そしてその、フェイト達にとっては当たってほしくない考えが見事的中してしまう。
そんなあきれ混じりのフェイトや、苦笑いを浮かべる瑞樹、放送に耳を傾けているクラスメイトや他クラスに向けて声の主は告げる。

『今日の放課後、五年生と試合の予定組んだから、ヒマならメンバーに入ってね～』

やっぱり。とフェイトと瑞樹の心の声が揃う中、放送はさらに続く。

『ちなみにフェイトと瑞樹は勿論参加するから、みんな楽しみにしててね～』

自身らの意志を無視する知らせに、更なる溜め息をつくフェイト。
一方瑞樹は笑っている。
実は既に諦めているだけだったのだが、そんな瑞樹にフェイトは無意味な会話をする。

「俺は何も聞いてないぞ」
「愚問だね、俺もだよ。まぁ、それが当たり前になりつつある、今日この頃だけど」

二人で諦めの会話を交わす。
そんな中フェイトは視線を感じ、そちらの方へと視線を向ける。
そこにはクラスメイトの女子達がいた。その少女達は頬を赤らめていたのだが、フェイトはその事に気付かず応対する。
どうしたの？　フェイトはそれまでとはうって変わった態度でクラスメイト達に尋ねる。

「えっと、今の放送って……／／／」

顔が赤い、風邪気味なのかな？　と、実に的外れな考えを浮かべながら、フェイトは丁寧に答える

「いや俺達も、今初めて聞いたんだ」

苦笑混じりにフェイトは答える。

若干呆れが混じりの答えに、少女達は落ち込んだ表情をする。

「じゃあ、フェイト君と瑞樹君は試合出ないの？」

実に残念そうな表情をする少女達。

そんな少女達に、横から瑞樹が優しく微笑みながら話し始めた。

「いや、多分出ると思うから、応援よろしくね」

「う、うん、頑張ってね！！」

瑞樹の答えを聞き、そう言って少女達は自分達の席へと戻っていった。

その後ろ姿を眺める瑞樹。

そんな瑞樹にフェイトは言う。

「俺、出るって言ってないけど」

「偶にはファンサービスでもしなよ」

「何だよファンサービスって？　それにファンって何だよファンって」

こんな人に惚れ込んだのが災難だったね。と少女達に心の中で憐

憫の気持ちを抱きながら、瑞樹は食事を再開する。
瑞樹自身は自分に向けられる恋慕の情に気付けるのだが、転生時に主人公スキルを貰ってしまったフェイトの方は、真っ直ぐと向かって来られないと気付けない。
そのため瑞樹は、度々フェイトに好意を抱く少女達を手助けしているのだ。
そんな瑞樹の態度にフェイトは釈然としないものの、瑞樹と同じように食事を再開した。

そしてフェイト達のクラスで昼食の会話が再開されるなか、とある一人の生徒がフェイト達の下に来た。

「おい、サッカー馬鹿。いい加減予定の確認ぐらい取れ、いきなり試合って言われても困るんだよ、普通」

オブラートにも包まず、比喩も使わず、自身の気持ちを正直にぶつけるフェイト。
そんなフェイトの言葉に、湊は笑いながら返す。

「いいじゃん、楽しいじゃんサッカー。それに今日はどうせ暇だろ、なら問題ない」

元気一杯といった笑顔を浮かべる湊。
そんな相変わらずの親友の反応を見て、フェイトは軽く溜め息をつく。

「……その勘に頼るの止めてくんない。ちょっと聞けば良いだけじゃん、何でこの子は学習しないの？」
「それが湊クオリティー」

他人に尋ねず、自身の勘を信じる湊の性格。それに対するフェイトの呟きに、瑞樹が律儀に返す。
瑞樹自身の方はフェイトとは違い、『人生諦めが肝心』と既に親友の修正を諦めている。
そんな二人が弁当を広げている机に、湊がパンを大量に置く。
それはパンの山、山、山。
その量にあきれ混じりの視線を送りながら、フェイトは湊に尋ねる。

「お前は相変わらず……。つーか昼、さっき食べてたよな。と言うのは置いといて。食べ物の量と、体の体積が合わないような気がするんだけど」

何時も考える疑問を口にするフェイト。
湊はその質問を聞いて、そのリスのようにパンパンに膨らんだ口を向けて答えた。

「ふがが、ふががぎ、ふがががが」
「それは、聞かないお約束。だそうだ」

何を言ってるのか意味不明な言葉。瑞樹はそれをフェイトの為に翻訳する。
ちなみに、何故瑞樹が湊の言葉を理解出来るのかと言うと、ただ単純に『答えを出す者』を使用したからであって、付き合いが長いからでは無い。
瑞樹を間に挟んだ会話、フェイトはそのままそれを続ける。

「今日用事があるから、日が暮れる前には帰るぞ」
「ふがふがが？」
「大切な事？」

「ああ、下手したら鳴海が吹っ飛ぶ」

厄介だねー。とフェイトの言葉を聞いた瑞樹はそう言った。
しかし、その言葉には焦りは微塵も感じられなかった。
湊も同じく、相変わらず口にパンを目一杯入れて、咀嚼しながら言葉にならない言葉を話す。

「ふががが？」
「手伝いは？　アレだったら俺も」

湊の言葉に、自分の言葉も加える瑞樹。
そんな二人の気遣いに感謝しながら、フェイトは話す。

「まぁ、大丈夫だ、気持ちだけ受け取っておく。二人ともありがとう」

そんなフェイトの言葉を聞いて、湊は少し考えてからまた話だす。
その間、口の中にパンを詰める手を止めずに、ひたすら食べ続けてはいたのだが。

「ふがが、ふがふがふががが」
「それじゃあ、五時前に終わりにしておく」
「そうしてくれ」

湊は一向に食事を止める気配はなく、そのため瑞樹を挟んだ会話は結局終わりまで続いた。

「橘！！　お前、また勝手に放送機材使っただろ！！」
「ふがぐぶがが、ふがが！！」
「リアル逃走中、開始！！」

自身の言葉を瑞樹に代弁させて、湊は後ろの扉から逃げ出した。
そんな親友の後ろ姿を眺めながら、フェイトはポツリと一言。

「面割れてるんだから、逃げても無駄だろ」
「まぁ、湊らしいって言えば湊らしいな」

コレまた相変わらずのやり取りを見て、フェイトと瑞樹はそう呟きあった。

報告&日常（後書き）

何故だか『ネギま』より早く完成した
と言っても、十分遅いが……

『ネギま』も半分程出来てるので、今しばらくお待ちを

設定　その２（前書き）

転生者設定です
追々追加するかもしれません

設定　その2

葵　瑞樹　（あおい　みずき）

黒髪　茶色の瞳
優しげな風貌

主人公の助言者的立位置を狙う
理由はそのほうがかっこいいし、主人公より楽だから
夢はお菓子職人

能力

料理の才
パティシエの才

金色のガッシュベルに出てくる全魔物の術
答え（アンサー・トーカー）を出す者

橘　湊　（たちばな　みなと）

茶髪に茶色の瞳
わんぱく少年と言った言葉がピッタリの人格と容姿
生前はサッカー選手で、今度の生は選手を育てるのが夢

能力

幸運
黄金律
カリスマ
コミニケーション力

未来予知とも言える勘
ＰＳＩ能力

フェイトとあわせて、聖少三大美少年

フェイト・アーウェルンクス

能力
Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒ
能力や力を開発したり、生み出したりする力
この力により生み出された力は、大概元の世界のマンガやゲームなどを元にしている

ちなみに、この力で生み出された力は、効果は似ているがオリジナルとは別モノ
魔力だけでも全ての力は使えるが、力の変換を使用する事により魔導師に気づかれないようにできる
その分タイムラグは生じるため、戦闘中はあまり使えない

ジュエルシードの暴走（前書き）

久しぶりの同時投稿！

ジュエルシードの暴走

「頑張れよ」
「じゃあ～な～」
「ああ、また明日」

瑞樹と湊からの別れの言葉、それに対してフェイトは返事をする。
そうしていつもの帰り道とは別の、市街地へと向かう道を歩いていく。
その道すがら、これからの事を考える。
まずは、二人ともケガをしないようにするのが第一優先だな。
そう結論づけて、フェイトは胸元の相棒へと声をかける。

「イグナシス、日暮れまで後どれぐらいだ？」
「（約一時間と少しです）」

返ってきた答えを聞いて、フェイトはこれからの予定を組み立てる。
そうしてフェイトは暇つぶしの散歩を始めた。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

とあるビルの屋上。

その淵に腰掛けながら『フェイト』はボーっと眺めている。

「何とまぁー、無茶な事を」

魔力流を撃ち込まれて覚醒したジュエルシードを見ながら、『フェイト』はポツリと洩らす。

魔導師となった今、フェイトがどれほど無茶な事をやっているのかが理解出来る。

それ故に洩らした言葉であった。

まぁ今は街の方だな。

すぐさま思考を切り替えて、『フェイト』は魔法を使うため言葉を紡ぐ。

「広域封鎖結界、展開」

『フェイト』の言葉が言い終わると同時に、辺り一帯の人気が無くなる。

コレにより魔法に関係する者以外に被害が出ることが無くなった。

「まぁ、次元断層が出たらただじゃ済まないんだけどね」

苦笑い気味に一人呟く『フェイト』。

そのまま『フェイト』は、待機状態の相棒を取り出す。

「イグナシス、セットアップ」

【Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ】

イグナシスの声が上げると同時に、彼自身を紅蓮の光が包み込む。

そして再び出てきた『フェイト』はバリアジャケットを纏っていた。
それと同時に彼は仮面をつけ、変声機の調子を確かめる。
「来たか……」
そうしている間に『フェイト』はフェイトとは別の、近づいてくる二つの魔力を感じた。
「我ながら、なんて言う感度だよ」
探査魔法を使わずに、リンカーコアの魔力を感知した自分を自嘲気味に笑う。
コレはデバイスを使わないず、魔力のみの肉体強化をする二人の相手をする内に身につけたものである。
その才能は、写輪眼を使う事により魔力を感じる事に慣れ、魔力を感知する才能が開花したのだ。
さらに本来なら目覚めても大した力に成らなかったのところを、自身が持っていた秀才の力で『フェイト』は魔力感知を完璧に習得していた。
そんな、自然と身に付いた異能の力を有効活用していると、『フェイト』の視界の端で桜色の光が映る。
「……」
そして無言のまま、目の前で行われる光景を眺める『フェイト』。
そこでは、なのはとフェイトがジュエルシードを巡って対立している所だった。

「私なのは、高町なのは。私立聖小大附属小学校、三年生」

なのはがそう名乗るも、フェイトの攻撃により中断させられる。
そのまま空中戦に縺れ込み、なのはとフェイトが互いにしのぎを削る。
それと同時にユーノとアルフも戦闘を開始する。

フェイトの攻撃を必死に捌くなのは。
一方フェイトは、冷静な態度でなのはに攻撃を繰り出していく。
しかしなのはも、伊達にレイジングハートと共に修行をしていた訳では無い。
フェイトの攻撃を受けつつも、隙を付いて魔法を放つ。
そうして反撃を撃たれ、フェイトは一旦距離を取った。

二人の距離が離れたのをいい事に、なのはは自分達の事を語る。
何故ジュエルシードを集めるのか、どうして魔導師になったのか。
その言葉に『フェイト』は決意が、そして気持ちが込められるのを感じた。
そんななのはの言葉に感化されたのか、フェイトの方を自分の事を語ろうとする。

しかし、それをアルフが遮った。

「フェイト答えなくていい、優しく「お前こそ黙れよ」！？」
「「！？」」
「テルティウムさん！？」

アルフの、なのはに対する暴言を止めるため、『フェイト』は姿を現し命令する。
その言葉を聞き、他の三人も動きを止め『フェイト』の方へと注

意を向ける。

「いつの間に？」

ユーノが、独り言のようなものを洩らす。

『フェイト』はそれに律儀に、そして先程とは打って変わった態度で答える。

「最初からですよ。第一、この結界は私が張ったものなんですから、気づきませんでした？」

いつものように丁寧な口調で話す『フェイト』。

先程の言葉は何かの聞き間違いなのか。と同時に考える四人動かずに、黙って『フェイト』の言葉を聞く。

まぁ、今はそれよりも……。『フェイト』は、ユーノに向けていた視線をアルフに向ける。

「覚悟を持った者同士の、全力の戦いに水差してんじゃねぇよ」

なのは達は明らかに怒っている『フェイト』の怒気に、驚き圧倒される。

普段とは違う乱雑な言葉や、その雰囲気に呑まれ動けないでいた。

しかし、その怒気を向けられたアルフは違った。

身に感じる殺気。

それは、元々野生の動物であった自身の本能を呼び覚ますのに、充分なものであった。

野生の本能。それにより感じるのは、ただただ圧倒的な強さだけであった。

自分が今まで出会った人々を超え、大魔導師と呼ばれた憎っくき

プレシアにも並ぶ強さをその身に感じた。
アルフはさとる。目の前の人物には、フェイトと二人がかりでも決して勝てない事を。
そんなアルフと対峙している『フェイト』は、自身の感じる怒りをそのまま吐露するだけであった。
「今度こんなふざけた真似してみろ、俺がお前を叩き潰してやる」
もしやったら、言った通りに潰されるだろう。
アルフはその身に感じる殺気から、自然とそう思えた。
一方、言葉を締めくくった『フェイト』は怒気を抑え、なのはとフェイトに向き直る。
「それで、ジュエルシードはどうなさるんですか？」
『フェイト』の言葉で我に帰ったなのはとフェイト。
その内フェイトはチャンスだと思ったのであろう、勢いよくジュエルシードへと飛び出す。
なのはの方もそんなフェイトとを追って、ジュエルシード目掛けてレイジングハートを構える。
そんな二人のデバイスが、ジュエルシードを中心に交差した。
その一瞬時が止まり、そして……
魔力が爆発した。
魔力の激流と称せる程の圧力が放出される。

ジュエルシードから発せられる魔力は圧倒的なものであり、ロストロギアと呼ぶに相応しいものであった。
そして、その圧力で吹き飛ばされるなのはとフェイト。ユーノとアルフは少し離れた位置にいたため、被害は殆どなかった。
そして『フェイト』は全身で踏ん張り、その場で耐えジュエルシードを見据えて動かなかった。

「大丈夫？　戻ってバルディッシュ」

フェイトはそう言って、壊れてしまった愛機を見つめ待機状態へと戻す。
そうして自由になった両腕を使い、体勢を整えてジュエルシードへと飛びかかった。
ジュエルシードへと一直線に飛ぶフェイト。
そしてジュエルシードの目の前まで来たら、その暴走している物体を何の躊躇もなく握ろうと腕を動かし、

「なっ！？」

自身にバインドが掛けられた事に気がつく。
手足に纏わりつく魔法陣は紅蓮の色。その色は、今まで自分と闘っていた子とは違う。
フェイトはそこで、この場にいるもう一人の魔導師を見る。
そこには予想通り、自分に向けてデバイスを構える『フェイト』の姿がいた。
何を！？　と問い詰めそうになるが、近づいて来た『フェイト』の言葉でたしなめられる。

「無茶な事はしないでください。あなたが傷ついて、悲しむ人がいるんですから」

そう言われたフェイトは、自然とアルフの事を思いついた。
一方『フェイト』は、彼女を両手で持ち上げてなのはの元へと飛び立つ。

そうしてなのはの隣に降り立つと、顔を赤らめているフェイトを降ろしてジュエルシードへと向き直る。
そこにユーノとアルフも闘いを中断してやって来た。
『フェイト』はジュエルシードの方を見ながら、なのはとフェイトに尋ねる。

「アレは私が封印します、異論は？」

そう聞かれて、なのはもフェイトも何も答えられない。二人とも先程の衝突でデバイスが壊れてしまっているのだ。
二人が何も言わないのを肯定と受け取り、『フェイト』はジュエルシード目掛けてデバイスを構える。

【Ｓｅｔ】

何も言わなくとも主人の意志を汲み取り、自身の周りに魔法陣を展開するイグナシス。
そんな、完璧なアシストをしてくれる愛機に感謝しながら、『フェイト』は魔法を行使する。

「封じ込め、イグナシス！！」
【ＯＫ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ】

『フェイト』の言葉を受けて補助を開始するイグナシス。そんなイグナシスの補助を受け、彼は魔法を発動させる。

イグナシスの周りに展開する四つの魔法陣。
その魔法陣から薄透明の、竜の顎がジュエルシードへと殺到した。
一体目がジュエルシードに食らいつくと、その食らいついた竜の頭ごと別の竜が食らいつき、またその竜ごと別の竜が……。といった感じで全ての竜が、ジュエルシードに群がった。

【Ｆｉｎｉｓｈ】

竜の顎がジュエルシードに群がり少しして、イグナシスがそう報告する。
イグナシスの報告を聞き、『フェイト』はイグナシスを軽く引く。
それだけで竜の顎達は火の粉のように霧散し、『フェイト』はなのは達の方へと振り返る。。
そしてフェイトの前で屈み、彼女の手を取る。

「今度からは、あまり無茶しないで下さいね」

『フェイト』はそう言いながら、フェイトの手のひらの上にジュエルシードを置く。
一方、渡されたフェイトの方は困惑している。
横にいるなのはと後ろのユーノ達も同じような態度だ。

「……何で？」

驚きで固まる中、フェイトの口から出た言葉は短い物であった。
その言葉を聞いて、『フェイト』は仮面の下で笑いながら答える。

「私にはコレは必要ありませんから」

でも……。フェイトは後ろを気にしながら呟く。

その仕草から『フェイト』は、彼女がもう一人の少女の事を気にしているのを悟る。
その、先程までとは打って変わった態度に『フェイト』は思わず苦笑しながら話す。

「こう言う時は、素直に受け取ればいいんですよ」
「……ありがとうございます」

『フェイト』の言葉を聞いて、フェイトもようやく受け取った。
そうして彼女は立ち上がり、相棒へと声を掛ける。

「行こうアルフ」
「……あいよ」

何か納得いかないのか、微妙な顔をしていたアルフだが、フェイトの言葉を受け彼女と共に去っていった。
去り際、フェイトはなのはの方を一瞥したが、すぐさま視線を戻し帰っていった。
立ち去るフェイトの姿を見て『フェイト』はもう一人の少女の方を向く。

「すいません、高町さん。そう言う訳で、今回も彼女らに渡す事にしました。流石にあれ程頑張る姿を見せられると、渡せざる終えないので」
「……はい」

『フェイト』の言葉に、なのはは俯きながらも答える。
またキチンとお話出来なかった。そう考え、落ち込んでいるなのは。
そんな俯くなのはに、彼は言葉を続ける。

「次回は次回で、渡す方はその時決めますので、ご安心を」

それでは……。そう言って『フェイト』は立ち去ろうとする。

「テルティウムさん」

それをユーノの言葉が止めた。

そんなユーノの言いたい事が分かったのか、『フェイト』はユーノ達に背を向けながら話す。

「以前も申し上げましたが、私はどちらの味方でもありません。ただ、この町で平和に暮らしたいだけですので」

では……。と会話とも呼べない言葉の応酬を一方的に切り上げ、『フェイト』は飛びさろうとしたが、一端止まりなのはの方に体を向ける。

「高町さん。諦めたら、そこで終わりですよ」

その言葉を聞いて、なのはは顔を上げる。

しかし『フェイト』は、それだけ言うとすぐさま去っていった。

ジュエルシードの暴走（後書き）

さぁ、夏期講習の時間だ

話し合い（前書き）

すいません　投稿、遅れました

話し合い

「大丈夫かい、フェイト？」

拠点へと戻ってきたフェイトとアルフ。

フェイトが私服に着替えて、ゆっくりとし始めた。そんな時、アルフはフェイトの体を気遣い声を掛ける。

至近距離で魔力の衝撃を受けたフェイト。その時の事が心配で彼女を労るアルフ。

フェイトはそんなアルフの問い掛けに笑顔で答える。

「大丈夫だよアルフ。ちょっと吹き飛ばされただけだから」

「それならいいけどさ」

フェイトの言葉に渋々引き下がるアルフ。そんなアルフをフェイトは微笑ましく思う。

そんな時チャイムの音が鳴る。

その音を聞いてアルフは眉を顰める。

「何だい、こんな時間に」

「新聞勧誘かな？」

不機嫌そうに喋るアルフ。

それとは対照的にフェイトは落ち着いていた。

「私が出るから、アルフはご飯の準備しておいて」

「あいよ」

フェイトの言葉に、すぐさま了承するアルフ。

フェイトはそのまま直ぐにインターホンの電話を取る。
「あの、新聞とかならお断……」
勧誘を断る言葉を話すフェイト。
しかし、インターホンからの声は予想外の物だった。
「少しばかり、あなた方と話をするために来たんですけどね。ミステスタロッサ」
「あなたは……」
テルティウムの声に驚くフェイト。呆然とするフェイトにテルティウムは尋ねる。
「とりあえず、良ければ入れて貰えませんかね」
「……ちょっと、待ってて下さい」
フェイトはそう言ってインターホンを切る。
「何だった？」
会話の終わりを見計らって、アルフがフェイトに尋ねてきた。
そんなアルフの質問に、フェイトは素直に答える。
「テルティウムさんが、話がしたいって」
「あいつが！？」
フェイトの返答を聞いて慌てるアルフ。
思い出すは先程の殺気。
野生の本能からヤバいと感じた相手。

「ヤバいよフェイト。あいつ、滅茶苦茶強いよ」
自らが感じた事を素直に報告するアルフ。
フェイトの方も緊張した面持ちで考える。
「大丈夫だと思うよ、直接敵対してる訳ではないし。ジュエルシードを貰った事もあるし」
「……そうなんだけど」
フェイトの言葉に一応は納得するものの、アルフは先程感じた殺気により言葉を濁す。
「嫌だったら帰ってもらおうか？」
アルフの様子がおかしい事から、フェイトは彼女を気遣いそう提案する。
そんなフェイトを見てアルフは尋ねる。
「フェイトはどうしたい？」
「私は……。一回、キチンと話がしたい」
何を思い、どんな考えで動いているのか。フェイトは敵になるかどうか判断するために、テルティウムと話がしたかった。
「……わかったよ、でも油断だけはしちゃだめだよ」
「うん、わかってる」
会うのを渋っていたアルフであったが、フェイトの意見を聞いてようやく頷いた。

フェイトはアルフの同意を得て、インターホンのスイッチを入れる。

「……今、開けます」
「わかりました」

テルティウムの言葉を聞いた後インターホンを切り、玄関へと歩いて行く。
アルフの方も黙ってフェイトに付いて行く。
玄関へとたどり着き、ドアの手すりへと手を掛ける。
そのまま直ぐには開けず、一回アルフの方を見るフェイト。アルフもフェイトの視線を受けて小さく頷いた。
フェイトも心の中で覚悟を決めてドアを開ける。
その先に居るのは、キッチリと立っているテルティウム。

「……どうぞ」
「ありがとうございます」

フェイトは慎重にドアを開けながらテルティウムを中へと招待する。
テルティウムはそんなフェイトの応対に感謝してお礼を述べる。

フェイトに続いて部屋へと入るテルティウム。リビングにあたる部屋であろう、ソファーやテーブルが置いてあった。
そこで一回立ち止まり、テルティウムはフェイト達に話す。

「別にあなた方に危害を加えようとはしませんよ」

まぁ、言うだけ無駄と思いますが。と付け足し、彼はフェイトに確認をとる。

「こちらに座ってもよろしいですか？」
「……どうぞ」

アルフと同じく警戒中のフェイトは、テルティウムの行動に注目しながら質問に答える。
では失礼して……。とリビングに置いてあるソファーに腰掛けるテルティウム。
フェイトとアルフはそんな彼とは反対側に、立ったままの状態でいる。
そんな警戒心むき出しの彼女らに見えるよう、テルティウムは十字架のチョーカーをテーブルの上に置く。
その行動に疑問を持ちフェイトは尋ねる。

「それは？」
「私のデバイス、イグナシスです。お預かりください」
「えっ！？」

テルティウムに言われた事が理解出来なかったのか、思わず声を洩らすフェイト。
そんなフェイトに彼は自らの行いの説明をする。

「一応『話し合いだけ』と言う証明です。対談の間、お預かりして頂いて結構ですよ」

ただし……。テルティウムは声のトーンを変えずに言葉を続ける。

「いくらデバイスが無いからと言っても、あなた方二人を倒すくらいは雑作もないので……」

柔らかい口調での言葉。しかし、その口調とは裏腹にテルティウムは目の前の前の二人に対してプレッシャーを放つ。
そのプレッシャーにより、フェイトは忠告が嘘ではない事を肌で感じる。
そんなフェイトの態度で無駄な反抗は無いと考えて、テルティウムはプレッシャーを解く。

「ああ後、コレつまらない物ですが……」

そう言って、テルティウムはどこからかケーキの箱を取り出した。

「……ありがとうございます」

全くもって相手が何がしたいのか判らず、軽く相手に呑まれているフェイト。
そんな主人に変わって、使い魔であるアルフが強めに聞く。

「あんたはいったい何が目的だい！！」

威圧的な態度のアルフ。
しかしテルティウムはそんな威圧感をもろともせず、何一つ変わらぬ態度で質問に答える。

「用件は二つ」

指を二本立てフェイト達に突きつける。
そして指を一本折りながら話す。

「一つ目はテスタロッサさんの治療。まぁコレは良ければですが」

肩を竦めながら話すテルティウム。
そんな彼とは対照的に、フェイトとアルフは驚いた表情をする。
「……何で？」
思わずそう口にするフェイト。
テルティウムはそんな彼女の疑問にすぐさま答える。
いつ気がついたのか、何故治すのか。と言う彼女の疑問に対して。
「先程あなたを抱えた時に気がつきました。そしてアナタには、万全な状態でジュエルシード集めに当たってほしいからです」
嘘偽りなき本心を口にするテルティウム。そんな彼の瞳を真見つめるフェイト。
仮面により顔の殆ど見えない中、唯一見えるその左目だけを真っ直ぐと見つめる。
そうして何かを判断したのかフェイトはゆっくりと頭を下げる。
「……お願いします」
「フェイト！？」
フェイトの返事にアルフが驚きの声を上げる。
そんなアルフをフェイトは諌めようとする。
「お願いしようアルフ。私達は回復魔法が使えないし、少しでも確実にジュエルシードを集めるためにも、ここはお願いしよう」
「フェイトがそう言うなら……」
異論はあるものの、主であるフェイトの意見を渋々尊重するアルフ。

そんな、自分の事を本気で心配してくれるアルフに笑いかけるフェイト。
そんなフェイトを見て、アルフはすぐさまテルティウムの方へと視線を向けて忠告する。
「一応信じるけど、フェイトに何かあった時はただじゃおかないよ」
「……心に留めときましょう」
では……。そう言った後の言葉は、フェイト達を驚愕させた。
「すいませんが、服を脱いでいただけますか。」
「／／／／／」
フェイトは思いもよらぬ言葉に、フリーズしてしまった。
「……わかりました／／／／／」
しかし顔を赤くしながらも、フェイトはすぐさま頷き了承する。
では……。テルティウムはそう言って彼女から視線をずらし、後ろ向きになる。
すると暫くは沈黙が流れるも、少しして布が擦れる音がする。
お願いします……。背を向けていた彼に対して、フェイトはゆっくりと言う。
ゆっくりと振り向くテルティウム。
そこには、服を脱ぎ背中を見せているフェイトの姿。それに対して何も反応せず、彼はすぐに傷の診断を始める。
すぐ近くでは、アルフがテルティウムの一挙一動を見張っている。
そんな中、テルティウムは全くもって平常心で診ていく。
いたる所にある傷。それを見てテルティウムは呟く。

「……やはり」
「？？？」

テルティウムの言葉にフェイトは疑問を持ち、顔だけ振り返る。
そんな彼女に、彼は優しく声をかける。

「大丈夫です、完璧に治療します」

そう言ってテルティウムは傷口に手を翳す。すると途端に手から光が出る。
その光をフェイトの傷口へと当て治療する。

「ん……」

フェイトの方も、ただジッとテルティウムの治療を受ける。
そうして全ての傷を治してもらい、フェイトは再び服を着始める。

「あの……、ありがとうございました」

着替え終わり、治療に対する感謝の言葉を伝えるフェイト。
そんな彼女の言葉に、テルティウムはソファーに座りながら答えた。

「いえいえ。コチラはキチンとジュエルシードを回収してもらうためなので、あまり気にしないでください」

それと……。テルティウムはそう言って懐に手を入れ、何かを探し始める。
お目当てのものが見つかったのか、探し始めてから少しして、彼はとある物を取り出した。

フェイトは彼の手にする物を見て尋ねる。

「それって、首輪ですか？」

「はい、その通りです」

フェイトの言葉を肯定して、その首輪をテーブルの上に乗せる。

「アルフさんへのプレゼントです」

「はい！？」

テルティウムの言葉に、今度はアルフが答える。

「何であんたが、私にプレゼントなんて贈るんだよ。さっきはぶちのめすとか言ってたくせに」

警戒しながらテルティウムに聞くアルフ。

そんなアルフにテルティウムは説明する。

「それはあなたが、高町さんの覚悟を踏みにじるような事をしたからです。それに言いましたよね、あんな事をしなければ、コチラも手荒な事をしませんよ」

それでコチラですが……。とテーブルの首輪を指す。

「その首輪はですね、空気中にある魔力素から少量ですが、魔力を精製する機能があるんですよ」

「「！？」」

聞いたこともない技術に驚く二人。

フェイト達は魔力を溜める技術なら多少は知っているものの、魔力素から魔力を生み出すなどリンカーコア以外に聞いたことが無い。

唖然とする二人にテルティウムは一方的に話続ける。

「まぁ少量ですから、戦闘では殆ど使えません。ですが……」

テルティウムの言葉に、フェイトとアルフは気がつく。

そしてアルフが話す。

「常に主の魔力を消費する使い魔なら、充分助けになる。ってことか」

この国には「塵も積もれば山となる」とも言います。アルフの言葉を補足するテルティウム。

テルティウムの言葉を受け悩むアルフ、目を閉じて考え込見て始める。

そうして少しの間、考え込むとアルフは決意した。

「その首輪、つけるよ」

「自分で言うのもアレですが、信用するんですか？」

ああ…。アルフはテルティウムの問いに短く答えた。

「あんたは一応、信用できるみたいだしね。一応だけど……。それに少しでもフェイトの助けになるなら」

そう言いながら、彼女はテーブルの上の首輪を取り、それを首へとつけた。

「感じはどうですか？」
首輪をつけたアルフに具合を訪ねるテルティウム。
そんな彼の問いにアルフは素直に答える。
「まぁ、まぁまぁだね」
そうですか……。と短く返事を返しテルティウムは立ち上がる。
「では、目的は全て果たしたので」
帰る姿勢を見せ、テルティウムは机の上のデバイスを手に取る。
そんな彼にフェイトは頭を下げ、再び礼を述べる。
「その……、いろいろと、ありがとうございました」
「いえいえ、飽くまで私の目的のためですから」
フェイトの感謝の言葉に、テルティウムは平坦に返した。
それでも……。とそんな彼の言葉に対しても、彼女は微笑みながら感謝する。
「助かりましたから、ありがとうございました」
丁寧な礼に、今度はテルティウムも素直に受け取った。
「どういたしまして。それでは夜分遅く、失礼しました」
そう言って、テルティウムはフェイト達の家から出て行った。

テルティウムが出て行ったドアを見ながらアルフは言う。
「一応は信用していいみたいだね」
「うん」
アルフの言葉にフェイトはすぐに返事を返した。
それにより、それぞれ同じ考えである事を理解した。
そんな確認が終わり、二人は夕飯がまだのことに気がつく。
「それじゃあ、ご飯にしようかアルフ」
「うん」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

とあるビルの屋上。
そこには、首輪をつけた一匹の猫が佇んでいた。
そこに一人の少年が降り立った。
「見ていたのか」
「はい」
少年の確認の声に、猫はすぐに肯定した。
そしてそこに猫は、更なる言葉を付け加える。
「マスターが幻術を使って、年頃の女の子の裸を観察した所もバッチリと」

「……ちょっと待って」

猫の言葉に異論を挟む少年。
そんな少年に猫の言葉の激しさが増す。

「いたいけな少女の純粋さに漬け込んで、ひん剥いて裸を見てたじゃないですか」

マシンガンのように続く猫の言葉、それに少年は口を挟めない。
それにより、猫の言葉は更にヒートアップする。

「ああ、可哀想なフェイト。嫁入り前だというのに、こんな変態仮面に素肌を見られて、きっと心に深い傷を負ったでしょう」

一匹で嘆く猫。
そんな猫に少年は必死に弁明する。

「いや、だから、傷の治療をしただけだって」

そんな少年の弁解に猫は全く耳を貸さず、さらに少年を責める。

「でも裸は見ましたよね」
「だから治療の……」
「見ましたよね」
「治療のた……」
「じっくりと、見ましたよね」
「傷の観察を……」
「触りもしましたよね」
「……」

少年は、自分がもの凄い窮地に立たされている事を自覚する。
「反省しなさい」
「……はい」
そして自覚した瞬間、無駄な抵抗を諦めた。
そんな少年の態度を見て、猫は話を変える。
「まぁお説教は後にして、コチラの報告を」
そう言って纏う雰囲気が変わる猫。それにより少年の雰囲気も変わる。
そして少年は自分の使い魔に頼んでおいた案件の具合を聞く。
「……と言った感じで、両方ともすぐにでも使えますけど……」
ああ。と少年は猫の報告を聞いて返事を返した。
「そちらも先程確認した。予定通りそれは使う方向で」
「ではやはり」
「ああ、予想通りだった」
猫の言葉に少年は肯定の意を表した。
猫は少年のその言葉を聞いて元気よく返事をした。
「わかりました、そちらの方は準備しておきます。お任せください」
「ああ、頼む」
確認が終わり、一人と一匹の別の話に変わる。

「八神はやての方には動きはありません。もちろん見張りの方も同じく」
「わかった、そちらも引き続き頼む」
「はい、お任せください」

そうして幾つか話を済ませ、話は終わりをむかえる。

「それじゃあよろしく」
「わかりましたマスター」

少年の言葉に猫は答える。
そんな猫に、少年はいたわりの言葉をかける。

「悪いな、いろいろと押し付けて」

少年のいたわりの言葉に猫は優しく返す。

「気にしないでください、私の我が儘もあるんですから。感謝だってしてるんですから」

そうか……。と少年は呟く。そうして少し黙って空を見上げる。
そうして暫くして、自らの使い魔に告げる。

「行くぞリニス」
「はい、マスターフェイト」

話し合い（後書き）

ネギまの方はさらに遅れます
何故ならデータがとんだからです。

とある休日の半日（前書き）

今回から緋弾のアリアの設定が出てきます
一応設定だけで、キャラは出さない予定です

とある休日の半日

「はぁー！！」

フェイトは気合いを込めながら、目の前の―自分の父親に殴りかかる。

「甘ぇ！！」

しかしナギはその拳を受け流し、フェイトにカウンターを決める。
フェイトはそのカウンターと同じ方向、すなわち後ろに飛んでダメージを逃がす。

「まだまだ！！」

しかし後ろに飛んだフェイトにナギは、さらなる追い討ちをかける。
手足全てを使ったナギの連続攻撃。
フェイトは必死にその攻撃を捌くも、遂に隙を突かれ拳の一発が腹に入る。

「くっ……」

もろに攻撃を喰らって、フェイトに一瞬隙が生まれる。
しかしナギはその隙を見逃さず、そのまま右拳をフェイトの顔面へと打ち込む。
フェイトの方もまだ諦めずに顔を反らし、ナギの拳を避けるも続いて迫る左拳の反応が遅れる。
迫りくる左拳、ヤられる。と思った直前、顔からほんの数ミリの

位置で止まる拳。
そこで気が抜けたのか、尻餅をつくフェイト。
そんなフェイトにナギは嬉々とした状態で言う。
「はーい、また俺の勝ち」
自慢気にそう言う父親に、フェイトは鍛練で乱れた息を整えながら返す。
「二十以上離れた自分のガキ相手に、何喜んでいるんだよ」
「いいじゃねーか、勝ちは勝ちなんだからよ」
自らの息子の指摘に、ナギは笑いながら返した。
そんな自分の父親を見てため息をつくフェイト。
ぶっちゃけ精神年齢俺の方が高いんじゃねーか？。といった疑問が胸の内に沸き上がる。
一応、前世と合わせても十歳近くは歳の差があるものの、それでも自分の方が上じゃね。と思わずにはいられないフェイトであった。
「まぁ、お前もなかなか上達してきたよ」
ナギの発言で思考から戻ってくるフェイト。
そんなフェイトの事は気付かずに、ナギはそのまま彼に話続ける。
「徒手格闘じゃもう、余裕でBランク武偵でも制圧できるぜお前」
おぉー怖。と自身をそう称するナギに、フェイトは少々嫌みを混ぜて返す。
「世界に九人しかいないRランク武偵にそう言われて光栄だね」

「なんだよー、何いじけてんだよー」

うれうれー。とナギはフェイトの頭を乱暴に撫でる。
フェイトは何とかしたいものの、上から押さえ付ける力が強すぎてされるがままになる。

「その歳でそれだけやれれば、十分過ぎんだぜ」

まぁ……。そう言って頭を撫で終わり、ナギはフェイトの顔を真っ直ぐ見る。

「お前が何のために力を求めているかは知らん。ただお前の親として、出来るかぎりの事はしてやる」

お前が強くなるために、きっちりと指導してやるとかな。具体的な事を上げるナギ。
そんなナギをフェイトは真っ直ぐと見つめる。

「普段家にいないし、俺に出来る事なんて他かが知れてるけど、俺に出来る事ならどんどん頼れ。出来るだけ助けてやるよ」

おおらかで力強い声。そして何よりも慈愛に満ちていた。

「父さん……」

少し感動した面持ちでナギを見つめるフェイト。
そんなフェイトの視線が照れ臭いのか、鼻の下を擦りながら遠くを見るナギ。
そんな彼にフェイトは頼む。

「じゃあ、いい加減イタズ「嫌だ」……何でさぁ」
頼み事の途中で拒否られるフェイト。
そんな彼をナギはいい笑顔で見つめる。
「それはそれ、つーか俺から生き甲斐を奪わないでくれ」
「……自らの息子に、殺傷力が高い罠にかける生き甲斐を持つな！！」
ナギの言葉を聞いて吠えるフェイト。
そんなフェイトを笑いながら諌めるナギ。
「いいかフェイト、世の中にはいろんな人がいるんだ。中には自分の息子に罠をかける奴ぐらい居るって」
「自分で言うな！！」
「何ピリピリしてんだよ、何だ反抗期か？」
「ちげーよ、極々普通の反応だよ」
「大丈夫だって、お前がギリギリクリア出来るくらいだって。レベルもお前に合わせて上げてるし」
「初めて自分の成長速度の早さを悔やむぜ、コノヤロー」
ナギの言葉を受け、フェイトがゲンナリした様子でそう言う。
そんなフェイトとは違い、ナギはとても力強い笑顔である。
「そんな事言うなよ。このまま行けば、冪乗弾幕戦だって直ぐ出来るレベルになる。俺の夢だったんだ、息子と銃弾を弾きあうの」
「いや、キャッチボールの要領で言わないでよ」
冪乗弾幕戦とは詰まる所、相手の銃弾を自分が撃った銃弾で弾いたり、跳ね返したり、撃ち落としたりと、おおよそ普通の人間が出

来るような事ではない。
しかしながらフェイトは、この父親が仲間達とそのような遊びをしているのを何回も見ている。
互いにの中間地点で火花が舞い、まるで雨のように潰れた銃弾が落ちてくる。といった地獄絵図を。
そんな非常識な誘いを蹴るフェイト。そんな彼をナギは文字通り、えーーー。と言うような目で見ている。

「当たり前だよ。『銃弾撃ち（ビリヤード）』を連続でやるなんて、無謀すぎるんだよ」

そうは言いながらも、父親との銃撃戦で既に何回か『銃弾撃ち』を見せているフェイトは、既に立派に非常識に足を踏み入れている。

「まぁ、そのうち出来るようになるさ。なんたって俺の息子なんだからな」
「……否定が出来ない自分がいる」

そんな風に会話を終えてフェイトは立ち上がる。
そんな彼にナギは尋ねる。

「もう一本いくか？」
「……お願いします」

構えながらフェイトは答え、ナギもそれに応じて同じように構える。

「何時でもいいぞ」
「……」

ナギの言葉にフェイトは無言のまま。
そんな息子の事を小さく笑っていると、その息子が突っ込んできた。
先ほどよりも鋭い踏み込みに関心しながらも、ナギはそれに応戦する。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「あー疲れた」

部屋の中でぼやくフェイト。その体は現在、ベットの上に投げ出されている。
そんな彼の言葉に反応するのは使い魔リニス。

「今日の御父上との稽古試合ですか？」

窓の外に猫の姿で座るリニス。彼女からの質問にフェイトは答える。

「そ、武器無しの組み手。五戦五敗と全敗だ、しかも一発も入れられなかった」

今日の試合を思い返し、フェイトはしみじみと喋る。
そんなご主人に使い魔は尋ねる。

「フェイトの御父上は、そんなに強いんですか？　たしか武偵と言う仕事でしたね」
「そ、ＮＧＯに所属する武偵で、最高ランクのＲ評価だ。って言ってもわからないか」

「取り敢えず、地球ではかなりの強さと言う訳ですね」

自分の主の強さを知っているリニスからしたら、その主に完勝するナギの話は信じられない話であった。

そんな使い魔の心情を察したのか、フェイトは父親の事を語る。

「リニス言っておくけど、俺の強さを天才と言うなら、父さんの強さはチートだからな。その気になれば、……小国を一人で相手出来る強さだ」

「……人間何ですか、フェイトの御父上は？」

「生物学上では、れっきとした人間だ」

一度、同じＲランクのラカンとのガチ喧嘩を見た時を思い返しながら、それを懐かしみ話すフェイト。

あの時はまだ小さく、母親のアリカや父の友人の詠春、アルビレオ、ガトウが戦闘の予波から守ってくれたのを思い返す。

辺り一辺が焼け野原に変わった時は、茫然としたもんだ。とまたも遠い目をしながらフェイトは語る。

「正直、ＳＳＳランク魔導士にも圧勝できると思うぞ。……いや本当に」

「……あなたが言うなら、そうなんでしょうね。かなり信じられませんが」

フェイトの様子から、それが紛れもない事実だと理解するリニス。

そんなふうにして、二人でナギについて話していた。

そんな暇潰しが終わりを告げる。

「……来た」

目印が地球へと戻って来た事を把握し、そう呟くフェイト。
そんなフェイトにリニスは窓越しに顔を向ける。

「行きますか？」
「ああ。それと、わかってるな？」
「当たり前です」

それを確認してフェイトは笑う。

「さて、では時の庭園に行きますか」

とある休日の半日（後書き）

正直ネギまとなのはを次何時ぐらいの投稿できるか不明ですすいません

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5787n/

魔法少女リリカルなのは　微チートなんだ

2011年11月13日07時28分発行